
切なく響く

伊咲 知里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切なく響く

【Nコード】

N3599S

【作者名】

伊咲 知里

【あらすじ】

きつと幸せな結婚なんて築けない。そんなことは最初からわかっていた。鳩尾、肋骨、鎖骨、喉、と徐々に存在感のある嫌らしい痛みが私を襲っても、貴方は知らない。それでも。貴方から差し出された手を振り払うことはできなかった。

キーワードに「じれじれ」（イラストとするローペースです）と一応保険のため「R15」タグを追加しました。途中からの追加になつてしまい、申し訳ありません。

誰もいない、広すぎるこの空間は無遠慮に私を蝕む。早く帰ってきてほしいと思う反面、帰ってきてほしくないという思いが葛藤する。彼はきつとこんな私を知らない。

「…ただいま」

静かなこの空間にマツチする低温の声。その声を聞いて、自分を一喝してから玄関に向かった。

これが私たちの一日の始まりの合図だ。

「おかえりなさい」

外がまだ、明るくなりかけているのかもわからない微妙な時間帯。戸籍上夫である新見^{にいみ} 誠^{まこと}は悪びれることもなく、無表情で帰ってきた。

「何か、食べます?」

もしかしたら声が震えていたかもしれない。不安に思ったがそれも今更、か。

いつも同じようなことを考えている自分に思わず苦笑した。もう、あまり考えないようにしよう。

「…別にいい」

視線もろくに合わせず言い放った。
これもいつものことだ。

「…そう。お風呂温めていますけど、入りますか？」

きつと、これも意味はない。

「いや、結構。着替えたらもう出るから。キミも会社だろ」

ここに住んでいるのに、彼がここのお風呂を使ったことは数回だ。
それなのに、いつも清潔そうな、爽やかな香りを漂わせている。元々体臭がいいのかもしれないと自分を慰める。…どこまでイタイ脳なのだろう。

「…はい」

いつもと変わらない。一回も名前を呼んでもらえたこともなければ、まともに生活をしたこともない。…なにが結婚、だ。こんなの同居とも言えやしない。

自室に消えていく後ろ姿を呪うように見つめてから、大げさに溜息を吐き捨てた。どうせ、最初からわかりきっていたことだ。この結婚に愛なんてないことは。

お風呂を温めても、わけのわからない時間帯のご飯も、なにかも馬鹿げてる。まるでピエロだ。

広すぎるリビングに一人。音をたてないようにそつと椅子を引いて座り、テブルに肘をつき、手で顔を覆った。もう何もかも嫌だ。無様に声を荒げて泣いてやりたい。そんなことをしても彼はきつと自室から出てきさえしないだろうけれど。そう思うと、またため息が出た。

「なんで…」

呟いた一言がすぐに闇へ消えた。

耳に入ってくる音は空気の音だけで、余計私を孤独にさせる。

やっと聞こえてきた足音に顔をあげ、急いで玄関に向かう。急がないとまた無言でこの家を出ていってしまう。

「あの、今日は…」

何時に帰ってきますか、とはつきり聞けたのは最初の一週間程度だったと思う。

「遅い。先に寝てくれて構わない。夕飯も結構だ」

視線をこちらに向けることもなく言い放たれる。聞こえてくる彼の声からは何の感情も読み取れない。うんざりしているのか、逃げ去りたい一心なのか、何も。

「わかりました」

そう言うと同時にドアを開けて、振り向きもせず、後ろ手でドアを

無残に閉めた。これも変わらない。リビングに戻り、時間を確認するとまだ6時前だった。朝の支度をするには早すぎるし、かといって寝るには遅すぎる。どうせ眠れはしないのだけど。

どうしようか迷った挙句、温めていたお風呂の存在を思い出し、入ることにした。この感情も洗い流してくれるのではないかと淡い期待を胸に、脱衣所に向かった。

午前7時55分。

いつも通り会社の最寄り駅に着いた。腕時計でもう一度時間を確認してから、会社に向かう。始業時間は9時からだが、あのまま家にいることは精神が崩壊するかとも思えるため、いつも早めに出社してしまう。この行動を優等生と揶揄する者もいるが、その方がまだマシだった。空気のような扱いをされる家よりは幾分も。

「里中さん。今日も一番乗り？」

デスクに座り、仕事に取り掛かっていると、背後から声をかけられた。

「…朝井さん。おはようございます」

彼、朝井 滋さんは私の上司でもあり、彼の同僚でもある。

私がか社で旧姓の里中を名乗っていることは、結婚当初暗黙の了解で決まっていた。会社の人は私が結婚していることさえも、知らないだろう。この上司を除いては。

「旦那と一緒に出勤したの？」

フロアに誰もいないことを確認してから朝井さんはいやらしい笑みを浮かべながら言った。

他人からは仲睦ましく見えるのだろうか。それとも、イヤミなのだ

ろうか。判断しかね、苦笑した。

「いえ、彼は先に出ましたので」

「そう……。おかしいな」。昨日はあんなに惚気てたって言うのに」

肩をすくめて言う姿を眺めて、これはイヤミの方だったのか、と気づいた。朝井さんからしてみると、有能な彼の妻がこんな不甲斐ない小娘ということが許せないのかもしれない。引きつく頬を無理矢理鎮め、笑顔を作る。

「そんな、馬鹿な。あの人が惚気なんて、朝井さんも御冗談を」

声は震えていないように聞こえた。自分を褒めてあげたい。

「里中さんも照れちゃって。いつそのこと、公言したらいいのに」

その笑顔の裏にどんな感情が眠っているのか私は推し測れない。

なんとかその場を笑顔で凌ぎ、話を切り替えるために椅子から立ち上がる。

「コーヒーでもいかがですか？」

「いただくよ。里中さんのコーヒーは美味しいって社内では有名だからね」

「褒めても何も出ませんよ？」

これ以上笑顔を保つ自信もなかったので、早口で言いわけ、足早に給湯室に向かった。給湯室には、ひんやりとした空気が漂っていたが、気にせず大きく深呼吸した。お湯を沸かす間、ただぼーっと何も考えないようにしていた。

2 (後書き)

デスクに戻ると何人か出社していたので、これ以上朝井さんに掻きまわされる心配がないので笑顔にもゆとりができ、すんなりコーヒ―をデスクに置けた。これで夕方まで逃げられる。そう思うと、やはりこの結婚に意味なんてなかったということに今更ながら実感した。

「サト、ため息なんてついて、どうかした？」

隣のデスクから同僚の工藤 澪がヒョイツと顔をこちらに向け、周りに聞こえないように静かに聞いてきた。その優しい心遣いが、今は沁みる。

「あ、澪。おはよ。昨日ちょっと眠れなくてね…。ごめん、辛気臭い溜息になってた？」

「なってた、なってた」

「あはは、澪に構ってほしくて無意識に辛気臭くなってたのかも」

「ばーか。それならいいけど。あ、ねえ。今日ヒマ？」

「ヒマ、だけど？」

「ちよつと晩ご飯付き合ってくれない？」

「全然いいよ。残業しないように頑張るわ」

「サトは余裕でしょ。私が頑張るんだって」

そう言うのと笑って自分の机に身体を収めた。つられるように私もパソコンと向き合った。

一瞬、彼に報告しようかと迷ったが、彼は私の生活に興味もなければ、関心もないのだから報告もないかと思いとどまった。

「そういえば、サトってお昼どうしてるの？ 食堂にいないよね？」
「うん。お昼はお弁当があるから適当な場所で食べてるの」
「うっそ。まだ、お弁当なんて作ってるの?!」

漣の声が大きく、周りから視線が集まった。今時お弁当持参は珍しくない。この視線は漣の声の大きさかなと思った。

「ちょっと、漣。声大きいよ」

「あ、ごめん。うるさかった？」

漣は前の席に座っている篠部君に視線を送り、聞いた。

「いや、大丈夫ですけど。里中さん毎日作ってるんですか？」

「え、まあ、作れる時は…」

そう濁して言ったが、実際は毎日作っていた。あの持て余した時間では、お弁当を作るなどして時間を潰さないと気が狂いそうなのだ。

「すごいね。もしかして、毎晩自炊？」

漣は完全に身体をこちらに向け、先ほどの仕事モードは足元のゴミ箱に廃棄されたようだ。

「できる日は。漣だって作れる日は作ってるでしょ？ 変わらないよ」

「いやいや、あたしとサトが同じレベルなわけじゃないじゃん。一回お弁当見せてもらったけどちゃんとしたの作ってたし」

「里中さんって家庭的なんですね」

そう言った篠部君の優しい笑顔を純粋な気持ちで受け止めることはできず、歪んだ心で受け取ってしまった。

「そんな大層なものじゃないから」

料理を毎日作ったところで、食べてくれるであろう人物が一度も食べしていないのだから。

「里中さんの彼氏は幸せだね」

背後から聞こえた声に、全員が視線を向けるとそこには朝井さんが意味深な笑顔を張り付けて立っていた。心の中で大きくため息を吐き捨てた。「それはイヤミですか」と勢いに任せて吐き捨ててしまおうかとも思ったが、言葉として出てはこなかった。私の理性もまだまだ捨てたものじゃない。

「残念。サトはフリーですよ。ね、サト」

薄にも結婚のことは言っていない。これは彼との暗黙の了解なのだから言えない。仕方がない。

「里中さん彼氏いないんスか？」

「彼氏、いない、かな」

嘘ではないよね、と心の中で励ますと、私の心をすかしているかのような、意地悪な顔で朝井さんが見てきた。

「好きな人とかいないの？」

朝井さんの声が、私の心をフルスイングで壊していく。

「好きな人、ですか」

「サトってそういう話ないよね。今までの恋愛も聞かないし」

「そう、かな？」

苦笑すると澪は、じっと私の眼を見てか

「ま、過去は過ぎ去った出来事だし。いいんだけどね」

と、男前なことを言うので惚れた。

「なんすか、その男前発言は」

「篠部にはまだまだ言えない境地だな。精進したまえ」

そう言うのと笑いがこぼれた。

「それじゃ、仕事に戻ってくださいーい」

軽い口調で朝井さんがまとめると隣から「はい」と呑気な対応で答えた。

4 (前書き)

ちょっと長いです。

それからノンストップで昼間まで馬車馬のように働くと、お昼休憩になった途端、待ってましたと言わんばかりに篠部君に声をかけられた。

「里中さん！」

漣の前の席である篠部君は、私に姿を見せるためにわざわざ席を立つてくれた。

「篠部君、何かわからない所あった？」

新入社員である篠部君はわからないことがあれば私か漣に聞くことになっている。

「いや、あの…。今日、お昼一緒にしていいですか？」

珍しく、少し齒切れの悪い口調に疑問を抱きながら、応えた。

「お昼？ 良いけど。食堂いく？ 漣は？」

会話を聞いていた漣にも声をかけると、ふるふると頭を左右に振った。

「残業しないように今やっちゃいます」

「そう。じゃ、頑張ってるね」

「ありがと」

頼られることが少ない私にとっては、後輩とのご飯なんて、久々の出来事。緊張で心が少し機能不全になりかけたが、頭を切り替える。食堂に行くならお弁当は持っていけないほうがいいかもしれない。

そう思い、カバンの中からお財布を取り出すと、篠部君はおずおずと提案した。

「あの、よかつたら食堂じゃなくて屋上行きませんか？」

屋上は、風が心地よくお昼にはもってこいの場所に思えた。何人かの社員が陣取っていたので邪魔にならないように端っこに腰を下ろした。

「篠部君もお弁当なの？」

「いえ、俺はコンビニです」

そう言うとコンビニのあの独特の袋を私の前に見せた。

「なるほど。だから屋上でよかつたんだ。いつもコンビニなの？」

「いえ。買える時間があればコンビニです。食堂のメニューにもよりますけど」

屋上にはちょっとしたイスと机が設備されている。

私たちは庭にあるような、白いコーティングが施されているカーデ
ンズデッキのようなものに向かい合って座った。

机の上にお弁当を広げていくと、篠部君の視線がお弁当にくぎ付け
になっていることに気がついた。

「…お弁当、そんなに興味あった？」

「あ、いや、すいません。凝視してしまって。ちょっと驚いただけ
で」

「驚いた？ 私ってそんなに家庭的に見えてないのかな？」

肩をすくめてわざとらしく言うと、篠部君は本気に受け取ったのか
目の前で大げさに手を振り「違います！」と反論してくれた。

その姿があまりにも必死なように見えたので思わず笑ってしまった。

「ありがとう。お世辞でもうれしいわ」

「いえ、お世辞ではなく」

もう一度小さく笑ってから、お互い箸を伸ばした。

篠部君は仕事のことを少し触れたが、特にこれと言って悩みがある
というわけでもない様子を頭をかしげてしまった。元々頼りにされ
ていないということはわかっていたのだが、ここまでとは思ってい
なかった。気分が少し落ちてしまった。

そんな私の様子に篠部君は眉にしわを掘りながら「どうかしました
か？」と聞いてくれた。

「いえ、何でもないの。それより、そろそろ戻らないと」

「え？ もうこんな時間だったんですね。気づかなくてすみません」

「うっん。久々に羽を伸ばしてゆったりお昼ができたわ」

篠部君が気に病まないように微笑むと篠部君も微笑み返してくれた。

「そう言えば。里中さんは今日の飲み会参加なんですよね？」

ゴミをまとめ、席を立ち、こちらの行動も見ながら篠部君がタイミング良く話しかけた。

「飲み会？ なんのこと？」

「工藤さんがさっき言ってたじゃないですか」

「…ご飯のこと？ あれって飲み会なの？」

「聞いてないんですか？ 課の飲み会らしいですよ。今日残業しなかった奴は、課長がおこつてくれるとか。他の課も何人かくるみたいですけど」

「な、何の飲み会なの？」

規模があまりにも曖昧すぎて全体像が把握しにくい。

「さあ？ 朝井さんが声かけて回ってるみたいですよ」

そう聞いて一瞬彼の顔が浮かんだが、朝井さんがわざわざ私の前に彼を見せるとも思えない。朝井さんは私と彼が一緒にいるところを見たくないように感じる。

「…そう。知らなかった。私はてっきり澪と二人だと…」

「もしかしたら工藤さんは参加しないつもりなのかな？ 俺の勘違いだったらすいません」

「あ、いいの、いいの。どうせ澪に聞けばわかることなんだし。篠部君はその飲み会に参加なの？」

「はい。新入社員は強制参加です」

そう言われて自分の新入社員だった頃を思い出し、思わず苦笑した。
なるほど。これは、定例会だ。

「あー…。新入社員強制の、ね。私も昔参加したわ。篠部君はお酒強い方なの？」

「…嗜む程度です」

期待の新人エースである、篠部君は大量に飲まされること請け合いだ。同情したくなった。

「そう…。多分、その飲み会だったら私たちも参加すると思うわ。

…でも、助けることはできないと思う」

「ええ?! なんかそんなにやばいんですか?!」

「うーん。どうなんだろう? 私はあんまり、そういうにぎやかな席に参加していなかったから当時驚いたけど、みんなはそんなにだったよ? ただ、お酒を飲まされるだけ」

「あー…。なるほど。がんばります」

そっというと篠部君は、屋上のドアを開けてくれた。

デスクに戻ると朝井さんと漣がせつせと働いていたので、給湯室でコーヒーを淹れなおした。

「お疲れ様。漣、お昼食べたの？」

「あ、サンキュー。お昼は食べたよ」

一口コーヒーを飲むと、柔らかく漣らしい笑顔を浮かべて「美味しい」と言ってくれた。それに笑顔で答えてから、もうひとつのコーヒーを朝井さんに差し出した。

「ありがとう、里中さん」

意味ありげに微笑む朝井さんに警戒しつつも、ここが職場であることを思い出し、無理矢理笑顔を作った。

定時時刻が近付くにつれみんながいつも以上に真剣な表情で仕事に向かっているので思わず凝視してしまった。

「サトはもう終わり？」

「もうちょっと、って感じかな。漣は？」

「私はもう終わっても支障なし！」

「それは、それは。お疲れ様です」

「もう終わるなら先にゲストルームに行ってるけど？」

「あ、もう終わるから先に行つてて」

「はい」

隣でPCの電源を落とす音が聞こえ、私も作成しているデータを上書き保存して、終わらせていく。

滞の後を追うようにゲストルームへ向かうと、途中で朝井さんに呼び止められた。

「里中さん」

「朝井さん。何かミスしましたか？」

「いや、資料は大丈夫そう。…アイツのことなんだけど」

アイツ、が彼のことだと瞬時に理解し、自分の体が硬くなるのがわかった。

「そんなに、身構えないで」

朝井さんは苦笑を浮かべながら、私の肩に軽く手を置いた。

「実は、昼飯を食べる時間がなくて」

「…はい？」

辛辣な言葉が押し寄せてくると身構えていたので、少し力が抜ける。

「君はお昼を作ってるんだろ？ ついでに作ってくれないかな？
？ ？ 忙しくて昼飯を買いに行く暇が取れないときがあるんだ」

彼になぜ、こんなお願いをされているのか見当もつかず、ただ、みつめるしかできなかった。

「だめかな？」

笑顔で聞いてくるが、その表情に、拒否を受理する気など毛頭ないように見えた。

「…私が朝井さんのお弁当を作るんですか？」

「違う、違う。そんなことしたら俺が殺されるよ。いや、その展開も面白そうではあるけど…。キミ、今日篠部と屋上でご飯食べただろ？」

「はあ」

「屋上って意外と見られてるもんなんだよ？」

またもや意味深な笑みを浮かべた朝井さんに私はもう、考えることを放棄したい気持だった。

「ま、それは、ともかく。アイツに作ってやってよ」

「…それは構いませんけど。彼が食べるとは到底思えません」

「キミもわかってないなー。ま、俺としては面白いからいいんだけど。話はそれだけなんだ。引き止めて悪かったね」

「いえ…」

しつくりこない返答に後ろ髪をひかれる思いだったが、それよりも漚を待たせていることを思い出し、その場を離れた。もしかしたら逃げ出したという本能が駆り立てただけかもしれないが。

「遅くなってごめん」

「んー、別に大丈夫」

「今日って新入社員の飲み会なんですよ？」

「あれ？ 聞いちゃった？ 内緒で連れて行こうと思ったのにー」

「なんで内緒にするのよ」

「サトの驚いた顔かわいくて好きなの」

そう言われてみれば、漑は事あるごとに私を驚かそうと企んでいた。

「まさか。今までそんな理由で私のこと驚かしてたの？」

「そんな理由って。大事でしょ？」

呆れて声も出なかった。

「じゃ、いこっか」

そんな私を見て満足したように優しい頬笑みを浮かべながら言った。
無言でうなずくと漑は軽快な笑い声を洩らし、歩き始めた。

連れていかれた場所は会社から近い、個人経営の居酒屋だった。漣曰く、朝井さんの知り合いのお店らしく今日は貸し切りだそうだ。

「な、んかすごいお店だね…」

思わずそう呟いてしまうような、そんなすごいお店だった。

「なんか朝井さんらしいといえば朝井さんらしい雰囲気のあるお店だね」

「うん」

店先でじつくりと眺めていると、お店のドアがゆつくりと開いた。

「…あれ？ 滋の会社の人？」

「あ、そうです。少し早く着いてしまつて…」

「あー、そんなの全然いいよ。もう準備できてるし、中入りなよ」

「では、お言葉に甘えておじゃまします」

「どうぞ、どうぞ」

眼前のにこやか好青年は店員とは思えない態度で接するからか、朝井さんの分身のようで、うまく顔を作れないでいた私を横目に漣はヒーローよろしく、終始愛想のいい態度で接してくれ、心強かった。

私たちが一番乗り、というわけではなく、秘書課の綺麗なお姉さま方や知らない営業課の人が何人か座っていたが、私は交友範囲が広いわけでもないため、知り合いと呼べる人はいなかった。

「あれ？ 工藤じゃん」

そんな中、奥にいた男の人が声をかけてきた。

「斎藤君も呼ばれたの？ なんでもありになってるなー」

「工藤こそ、呼ばれてたの？」

「あたしは今、朝井さんの部下だもん。営業の斎藤君とは土俵が違
うんですー」

「あ、そうなんだ？ 異動になったとは聞いてたけど。…えっと、
もしかして、里中さん？」

「は、はい。里中です」

「やつぱりー？ 覚えてない？ 一応、俺同期なんだけど」

頬をぱりぱりと掻きながら、でもそんな仕草が絵になる好青年に困
った顔をむけると、澪が笑いながら助け船を出してくれた。

「覚えてるわけないって。同期って言っても何百人っているんだか
ら、同じ課でもなければ知らないって。それにこの子、ほぼ直帰で
飲み会とかでないし。営業のエース君は人を覚えるのが長けている
みたいだけど」

「どうも。イヤミをありがとう」

そう微笑んだ顔も爽やかで、きつとどんな嫌みを言われたってその
爽やかな笑みでかわしてしまうのだろうな、とぼんやり考えていた。

「サト、この無駄に爽やかな男が営業部エース、斎藤 純一君。ち
なみに、営業課の前は企画課にいて、私と少し仕事してたの」

「そうなんだ。営業の斎藤君って噂で聞いたことある。お目にかか
れて光栄です」

大袈裟に畏まって言うと、斎藤君は爽やかな笑みに目尻にしわを作
って優しさも加わった。

「どんな噂か気になるところだけど、とりあえず座りなよ」

「そうだった。斎藤君の横ってうるさそうでいやだけど仕方ないね。
サト、いい？」

「もちろん。横、失礼します」

そう言つて、座敷に腰をおろした。

「それにしても。営業マンがよくこんな時間に来れたねー」

見渡す限り、今夜の主役である新入社員も幹事の朝井さんもまだいないようなので飲み物など頼まず、自然とおしゃべりタイムに突入した。

「俺は取引先から直接きたからだよ。だから営業の奴らはまだ来てねーの」

「なるほどねー。相変わらず、要領のいいことで」

「そういえば、さつき漣と斎藤君、同じ課にいたって言ってたけど……」

「そう、そう。私たち入社してすぐ企画課に配属になってるから」

「そう、そう。俺は一年企画課にいて、その後営業に移動になったってわけ」

「私は二年企画課で、その後今の総務課に移動になったの」

「そうなんだ。私はずっと総務だからなんか同じ会社なのに変な気分」

「そういえば、サトってずっと総務だね。まー、合ってるから移動がないんだろうけど」

ここで会話が一度落ち着いた。私がいるから会話のテンポが悪くなってしまうのかな、と頭によぎり、不安に思うと、ふいに斎藤君の口角が不自然に歪んだ。

「朝井主任はどうなの？」

お酒の入っていない素面の状態でこんな会話を切り込んでくるあた

り営業のエースなのだろう、と感心した。

「朝井さんは、すごいよ。一人ずつちゃんと見てて、というか、見過ぎてて怖いくらい。新見課長とは違った緊張感かな」

何気ない会話に、まさか彼の名前が出てくるとは思わず、ギュツと心臓が縮んだ。痛い、と思う前に動揺が表情に現われてしまったのではないかと焦った。きつと瞳孔が開いたはずだ。

「あー、新見課長ね。あの人は別格、別格」

自分の心配とは裏腹に、会話は滞ることなく、スムーズに流れる。二人に気づかれないようにゆっくり息を吐き出した。

なぜ、企画でも営業でもない彼の名前が出たのか、聞こうか迷っていると入り口あたりが騒がしくなった。

「お、やっと到着かな？」

そう言つて、澪は身体を少し伸ばし、入り口の方へ顔を向けた。私の席からは柱とついたてによつて、誰が来たかまでは確認出来ず、ドギマギしていると奥の方から、甘く可愛らしい声で「朝井さん」と言う声が聞こえ、朝井さんの到着がわかる。朝井さんが来るということは、新入社員も一緒に来ているのかな、と無意識に判断する。

「あ、もう来てたの？ 遅くなってごめんねー」

そう言つて席まで来ると、秘書課の方がさつと上座へと案内する。

無駄のない、スムーズな動きに思わず見とれていると隣の斎藤君も
漣も同感だったのか、苦い表情を浮かべていた。

「流石、秘書課さん」

斎藤君が嫌味とも感嘆ともとれる口調で囁いた。

「それ、イヤミでしょ」

すかさず、漣がツツコミをいれると、斎藤君はわざとらしく肩をす
かした。

7 (後書き)

誤字訂正

そんな二人を横目に、ウロウロしている新人社員へ意識を向けた。その姿は、初々しさと爽やかさを放っていて、見様によつては微笑ましく見える。

そんな集団の中から篠部君の姿を見つけると同時に彼も私たちの姿を見つけたようで、綺麗な顔を親しみやすい優しい笑みへ崩した。

彼は元々背が高く、今時の若者らしい垢抜けた容姿で、何もしくなくとも一目置かれるのにわざわざ自分から身体をすり抜けさせ、こちらに向かう行動には、感心させられる。

「里中さん。こんなところに座ってたんですね」

綺麗な二重瞼は多少笑みで崩したとしても、輝きは失われずに放たれ、眩しいくらいだ。

「うん。早く着いちゃったから座ってたの」

「おい。私に挨拶は？ まあ、いいけど。それにしても遅かったね。残されてたの？」

「いえ。主任に引きとめられてたんです」

「朝井さんが？」

漣は、眉間にきつく後が残るほどのしわを浮かせ、怪訝そうに言った。私も斎藤君も同じような表情を浮かべていた。

「…なんか企んでそうだな」

流石、エース。

「同感」

漣が溜息と共に吐き出すと、私も無意識に頷いていた。

どうしてやろうか、と漣が囁くが、すぐさま上座から聞き取りやすい朝井さんの声が響き、仕方なく朝井さんの悪巧みについては保留となった。

「でわでわ。遅くなりましたが、今いるメンバーでとりあえず乾杯しますか」

乾杯の音頭も朝井さんが当然のように仕切り、宴の始まりとなった。音頭を取り終えると、すかさず「今夜は無礼講だから」といつものように掴めない笑顔を張り付けながら言い放った。私たちはまたみづめあつて苦笑を洩らしつつ、お酒に口をつけた。

「里中さんは飲める方なの？」

既にビールを三分の一ほど飲み終えている斎藤君に聞かれると思わず、苦笑してしまった。

「強くはないと思う」

「工藤とはよく飲むの？」

「うん。さすがに漣程飲めないけど」

「確かに、サトは弱くはないけど私より強くもないね。まー、私が強すぎるだけだろうけど」

そついうと目の前に置いてあるビールを一気に煽った。

「よ、さすが工藤！　良い飲みっぷり！　ほら、お前も飲め」

いつも以上に人懐こい笑顔の篠部君に、わざとらしくお酒を勧めると、篠部君は嫌な顔ひとつせず「はい」と答え、ジョッキに残っているビールを美味しそうに胃に収めた。

隣の斎藤君は小気味良い高音の口笛を鳴らしその姿を称え、お返しとばかりに自分も一気にビールを流し込んだ。

やっぱりこの流れか。

心の中で悪態をつく。

そんな私を見越したのか、澪も斎藤君もいやらしい笑みと期待の籠った瞳で煽る。

この定例会では、幹事が“無礼講”と言うと、最初の一杯目は先輩後輩関係なく一気に胃に流し込むという、学生のような風習がある。26にもなつたいい大人が酒の飲み方も知らないのか、と言ってやりたいが、この風習がある年の同期は仲良くなるという実績めいたものがあるから仕方がない。

一応飲みやすいカクテルを一杯目にしていた自分を褒めつつ、胃に流し込んだ。

周りでもすでに先輩が後輩をあおり、酒を胃に流しこんでいるようで、あちこちで口笛や拍手、黄色い歓声が聞こえた。その中でも、朝井さんが私たちに期待めいた視線を投じてきていることに気づいていたが、三人ともあえて触れずに二杯目の酒を頼んでいた。

9（前書き）

今更ですが、設定や氏名、団体、世界観はフィクションですので、作者のご都合主義にお付き合いいただければ、と思います。（言い換えれば、あれえない設定でも目を瞑ってやってくださいと言う切実な願いです）不甲斐ない作者ですが、更新停滞しないよう頑張ります。

「なに？ あの朝井さんの視線」

「工藤部下だろ？ 酌ついでに聞いて来いよ」

「いやよ。あんな、いかにも悪巧みしてますって顔の朝井さんに自ら行くなんて」

頭を左右に振りながら澪は本当に嫌そうに吐き捨てた。その意見に賛成の私も苦笑を浮かべていた。

「それもそうですよね。朝井さん、今日のためにサプライズを用意してるってこぼしてましたし」

目の前に置かれた枝豆を頬張りながら篠部君は淡々と言い放った。その言葉を聞くや否や斎藤君と澪の顔が輝きに満ち、嫌な予感が頭をよぎる。

「なになに？！ その面白そうな話題！」

「朝井さんのサプライズとか恐ろしすぎて面白そう！ 新人、他に何か言ってなかったのか？」

「何も言っではなかったですけど、多分新見さんに関係してるんじゃないかって思います」

「新見さん？ なんでまたあの鬼畜？」

嫌な予感があたたつたように、心臓が激しく動き出した。自然と息が止まり、ロボットのようにな動けなくなった私に気づかず、三人の会話は弾む。

「ここに来る前に朝井さんが新見さんとなんか話してたんですよ。」

新見さんは特にこれと言った不自然な点はなかったんですけど、話の途中途中で朝井さんが僅かに口元を緩めるんですね。なんか、その様子が、隠しきれない笑みって感じで」

「なるほど。新見さんはわかってない様子だけど、あきらか、朝井さんは新見さんに何かする様子だった、と」

「はい。あ、工藤さん。週明けに見てほしいモノがあるんですけど」
そう言うのと、漣と篠部君は仕事の話に移行した。

「里中さん？ 大丈夫？」

視線を床に落としていた私を労わるように、覗き込んでくる斎藤君に笑顔を作り「だ、大丈夫」と言った。どこからどう聞いても、大丈夫そうに聞こえない私の声色に苦笑する。

「そう？ 酔ったのかな？ お水貰おうか？」

「大丈夫。久々に飲んだからちょっとぼーっとしちゃったただけだから」

「それならいいんだけど…。無理して飲まなくていいからね？」

優しい口調に笑顔で交わすと、隣の漣が大袈裟に溜息をこぼした。

「サト。斎藤は気をつけた方がいいよ。女の敵だから」

「おいおい。里中さんに変な事吹き込むなよ」

オドケた調子で言う斎藤君が面白くて、思わず笑ってしまった。

そんなことをしていると、周りがざわめきだしたので私たちは顔を合わせた。

「どうしたんだろう?」

漣がそう言い終わると同時に奥から甲高く女特有の声で「新見さん!」という黄色い声が聞こえた。

「…鬼畜め」

斎藤君が私の耳元付近でそうつぶやいたが、そんなことに気にとめられるほど落ちていてなどいられず、彼の方に視線を送ることに精一杯になっていた。

彼は、参加している者たちの顔を一周見やると、私のところで不機嫌そうな顔を浮かべた。その、何気ない仕草が、私の身体を無条件に反応させた。そんな様子にいち早く気づいた斎藤君は肩に触れながら「大丈夫?」と優しく話しかけてくれた。

固まる身体をぎこちなく溶かし、斎藤君にこくりと頷いて見せてから、また視線を彼に戻したが、彼は私のことなど最初から気にしていなかったかのように、朝井さんと話し込んでいた。その対応に自分が異常に傷ついていることに今更ながら気づいた。

「まさか、ほんとに新見さんまで出席するとはね。一体何の飲み会なんだか」

やれやれ、と漣がこぼした。

そんな漣にも触れずに、固まって使い物にならない身体に脳も機能を果たさず、ただただ彼を見つめていた。

「里中さん、ホントに大丈夫?」

「ちよ、つとお手洗いに…」

「ついて行こうか？」

心配そうに覗く澪と斎藤君に首を振り、一気に身体を叱咤する。少しでも気を抜くと膝から崩れ落ちてしまいそうだった。

傍に置いていた鞆を手に取り、トイレへ向かった。一瞬、このまま逃げ帰ってしまったおうかとも思ったが、それが何の解決になるのだと自分の逃げグセに反吐が出た。

10（前書き）

遅くなりました。すみません。

鏡に映る自分の情けない表情と対面すると、泣き叫びたくなった。

何が。

何が気に食わないのだろう。私という、存在そのものに嫌悪感があるように思えてならない。

そこまで考え、鏡から視線を外し、溜息を吐き出した。

…そんなこと今更では無いか。

行き場をなくした想いを流すように、手を洗ってトイレから出た。

「君は、何をしているんだ」

トイレのドアに向かい合うようにして立っていたのか、目の前に急に現れた彼に驚き、無様に目を見開く。

「に、新見さん？」

間の抜けた声色に自分でも嫌になったが、それ以上に彼の顔が歪んだので、息を呑んだ。

「…君は、」

呆れたような声に、ついに見捨てられるのではないか。そう思うと、

形振り構わず縋り付いてしまいそうになる。

どうしたらいいのかわからない。目の前にあるあの逞しい腕にしがみつけばいいのか？ それとも泣き叫べばいいのか？ 頭の中でぐるぐると流れる思考がどれも的外れに思え、振り払うように頭を軽く振ると、視界の端で漑の姿が見えた。

「サトに新見さん？」

この場に似つかわしくない漑の透き通った声が響いた。

「み、漑」

状況についてこれないのは、トイレを出た瞬間からだ。もう私の脳は機能することすら放棄していた。

「どうしたの？ サトと新見さんの組み合わせなんて意外。もしかして、新見さん口説いてんですかー？」

ニヤニヤとした表情でこちらに近づいてくると、終いには新見さんの腕を突ついた。なんてツワモノなの。

「…工藤。お前酔ってるのか？」

「まさか。親友の貞操の危機を救いに来たんですよ。天の使いですよー」

漑の呆れた対応に目も向けず、彼は私の方へ意味ありげに視線を向けた。

「…君は、言っていないのか？」

その言葉の指す終着点がわからず、あたふたと視線を彷徨わすと、彼は興味がなくなったのか漣に向き直った。

「工藤、この後の予定は？」

「何ですか？ 私、新見さんタイプじゃないですよ」

「…この子を送って貰いたいんだが」

「サトを？ サト、そんなに体調悪いの？ ごめんね。気づかなくて」

「なっ！ だ、大丈夫です！ わ、私まだ」

「いいから。工藤もそのままウチで休むといい。俺はまだ仕事があるから」

そう言う座席へ戻ろうとしたので、思わず腕を掴んだ。彼は掴んでいる手を振りほどく仕草もせずに、すぐに振り返り私をただ見つめ返した。その眼は、なんだ、と語っていた。

「あ、あの。漣を家に、ですか？」

「そう言ってる」

「私、一人で帰れますし、その…。言っていいんですか？」

「…好きにしろ」

そう言うのと、もう話すことがないと判断されたのか、一度も振り返ることなく、座敷へと戻って行った。

「…サト、なんなの？ さっきの態度といい、意味わかんないんですけど」

当然の抗議に両手を挙げて降参したくなった。なんだったら、白旗さえ振ってやりたいほどに。

「…詳しく話すから、とりあえず漣の荷物を…」

「あー、それなら一応、トイレに立つ時持ってきたから平気。このまま退席していいってことだね？」

「…多分。挨拶できないのがちょっと不安だけど、このまま帰らして貰おう」

どうせ、宴会はぐちゃぐちゃになっていて話なんてまともに聞いていないのだし。

そう、自分を慰めつつ、静かに店を後にした。

外気は少し冷んやりしていて、沸騰きった脳みそにはちょうどよかった。

「さっきの話だけど、もしかして、聞いてはいけないものを聞いてしまった感じ？」

漣には珍しく、恐る恐る聞く仕草がなんだか可愛らしくて、緊張していた糸がパツンと一つ切れた想いだった。

「ううん。大丈夫」

微笑んでみせると、その真意を探ろうと真剣な瞳でじっとこちらの表情をみつめた。

「…そう。それならいいんだけど」

「漣こそ、今から大丈夫？」

「あ、それは全然問題ない。一人暮らしだし、明日特に予定もないし。サトも一人暮らしなんですよ？ 確か、私の二つ先の駅だよ」

「？」

そう聞かれ、思わず苦笑した。

11 (前書き)

短めです。

そつだ。もう話は始まっているんだつた。

「そのことなんだけど…。私引越し、したの」

苦笑する以外にできる表情も知らず、気まずさとか何か話さなければという圧迫感だけでなんとか声を絞り出す。

「え？ そうなの？ 知らなかった。最近？」

「さ、三ヶ月前に」

漑は何かを感じ取ったのか、少し考えるように間を置いた。

「その新居に招待してくれんの？」

考える仕草を解くと優しい雰囲気を纏い言い放った。

漑は、きつと何か感じるどころがあつたのだろつ。そう思うと胸が張り裂けてしまいそんな痛みが身体を襲つたが、そんな自分勝手な痛みを表に出すのも申し訳なく、ただ頷いた。

「もしかして、新居に侵入する友人第一号？」

戯けた仕草が、心に沁みた。

「…うん。ここからだと電車に乗るんだけど、いい？ まだ終電には余裕があるし」

「全然いいよー。楽しみ」

優しい笑顔に励まされつつ、二人で駅に向かった。

最寄駅から歩いてすぐ住宅街が広がる。その中でもわりと新しく建ち、洋風の外観がこの界隈から少し突出している。これが、私たちの住む自宅だった。

「すっごー。高級マンションだ」

私が初めて連れて来られた時も同じようなアクションを心の中で叫んだので、思わず苦笑してしまった。

「…こつち」

そう言って、自分たちの住む部屋へ案内する。

きつと、これから話す御伽噺に漣は激怒するだろうな、と頭の端っこで思いながら。

玄関からすでに興奮状態だった漣をなんとか宥め、とりあえずリビングに座らせる。そうすると、来た意味を思い出したのか、大人しくなった。

「何か飲む？ って言っても、コーヒーか紅茶くらいしかないんだけど」

「じゃあ、コーヒーで」

「わかりました。荷物、空いてるところに置いてくれていいから」

息の詰まるような空気、とまではいかないが、いつもと違う空気にお互い戸惑いながら、落ち着きも取り戻せぬまま向かい合った。

「…コーヒーありがとう」

「うん。…急に、ごめんね」

「それは別にいいけど…。さっきのどういふこと？」

遠回りが面倒だったのか、彼女はコーヒーを一口含むと、意を決したように問いかけた。

「…察しの通り、新見さんと暮らしてるの」

震える声を気にせず、視線を机の上に置いたコーヒーへ落としながら力なく言った。

「サト、ちゃんと話して」

咎めるような声に、息が詰まりそうで誤魔化すようにコーヒーを流し込んだ。

「三ヶ月前に新見さんに提案されたの…」

あの、三ヶ月前の夜に

三ヶ月前の夜、私は珍しく朝井さんに残るよう言われていた。朝井さんが残業のようなことを言うのは珍しく、何か大変なことでもあったのかな、なんて呑気に考えていた。

朝井さんに言い渡されていた資料を作成して待っていると、フロアに残る人々が減っていった。その様子を待ち望んでいた様に、朝井さんは声をかけてきた。

「里中さん、ちょっといいかな？」

人が減ったからか、いつもより静かなフロアにはよく響いた。

「あ、はい」

それに対して、私の間の抜けた声がフロアに響き、軽く落胆するも誰も気に止める素振りは見せなかった。

「小さい方の会議室に来てくれる？」

朝井さんはそう言い終わるとデスクから立ち上がり、歩き始めた。一度も振り返られることなく、無言で会議室までたどり着く。フラシク朝井さんのキャラから考えて珍しく、大人しい態度に戸惑いを覚えるが、つつこむほどでもないのです、そのまま会議室に入室する。

電気をパチンと付けると暗く不気味な一角に明るさが戻り、不気味さは払拭される。

「急に呼び出して申し訳ないね」

ここに来て漸くいつもの朝井さんに感じ少し落ち着き、「いえ」と言って頭を軽く振った。

「実は里中さんに頼みたいことがあるんだ。…いや、頼みたいことと言つと少しニュアンスが異なってしまうんだけど」

「なんですか？ 改まって…」

「里中さんは、ご両親が、その…」

どうやら今夜の朝井さんはいつもとわけが違うようだ。歯切れの悪い朝井さんに、苦笑を浮かべながら「はい。二人とも既に他界しています」と言つた。

父親は脳梗塞で高校の時に、母親は社会人になってから心不全で他界している。父親の時はしっかりした葬式をしてやれたが、母親の時はパニックで何が何だかわけもわからず、叔母にまかせっきりだったことを今でも苦い思い出として残っている。

「どうしたんですか？ 朝井さん、おかしいですよ？」

いまだに苦い顔でなかなか話を切り出そうとしない朝井さんに、今更同情されたのかと不安に思い、おどけた様子で言葉を紡いだ。少し滑稽に思えたが、それも仕方がない。

「実は、頼みたいことつてというのが、その…」

視線を外し、左耳あたりをぽりぽり掻きながら気まずそうにふわふわと言葉を浮かべる。一体どんなお願いをされるのかと、つばを飲

み込むと同時に背後からドアの開く音が響いた。

「おい。遅いじゃないか」

すかさず文句を垂れたのは目の前の朝井さんだ。

「彼女にはもう話したのか？」

とくに弁明する様子もなく言い放った。

「お前は本当に馬鹿だな！ 里中さん、こちら新見 誠課長。主に海外支部で飛び回ってる偉いさん」

朝井さんの皮肉なのか、感嘆なのかわからないような態度と急にあらわれた新見さんに戸惑いつつ、慌てて頭を下げる。

「総務課の里中 春香です」

「里中さん。さっき言ってた、頼みたいってことなんだけど」

「もういい。俺が言う。俺はちよつとした厄介な事情があつて今すぐにも結婚しなければならぬ。そこで、君に頼みたいということとは」

響く声がやけに甘く、私の脳が誤作動を起こしたようにうまく働かない。

そんな私に構うこともなく、新見さんは小さく息を吐き捨てた。

「俺と結婚してほしい」

夢に見たプロポーズはどこか投げやりで、悲しく崩れ落ちる。現実はいいつも凶暴に私を噛みついてくる。

「あーっ！　？もう！　？なんで、お前はそうなんだよ！」

ピリピリした会議室を真つ二つに割る様に朝井さんの嘆き声が響き、驚きのあまり肩がぴくついた。

「朝井は黙ってる。もし、了承してくれるのなら、最低一年は共に結婚生活を送ってもらうことになるが、君にはデメリットが少ない様に配慮する。離婚するもしないも君に決定権があるし、離婚するとしても慰謝料として今と同じ給料、賞与にプラスアルファ上乘せする。生活に困らせることはしない。…ただ、戸籍に一つバツがつく」

そこまで淡々と言い放つ新見さんとその傍らにいる朝井さんは、傍観者に徹したのか、大袈裟なため息を何度も吐き捨てるだけにとどまっていた。

「君には、ただ頷いてほしい」

目を射抜くほど、みつめられ放たれた言葉が暴力的に私の身体の中を駆け巡る。

きつと。

これはなにかのどつきりなんだ。

こんなことあるはずがない。

そう、理性で自分を抑え付けるが、だからどうしたと本能が告げる。だからどうした。

あの、憧れの新見さんと結婚ができるなんて夢だろうが構わないのではないのか。

その夢が例え悪夢だろうと夢の中で会えることを願っていた私にと

つては願いもしない申し出ではないか。

頭の隅っこに理性を追いやると、直ぐに自分の顔が俯いた。本能とは恐ろしいものだ。

「…ありがとう。これから、よろしく」

甘さの含んだ声に聞こえたのは、きっと私が都合よく脳内で変換したんだ。

「はい…」

時間も遅いので、詳しい話は明日に持ち越しとなった。

朝井さんと新見さんを残し、先に会議室を退室し、フロアに戻る。

フロアには、もう余り残っている人は見当たらない。

デスクの上に少しだけ溜まった書類や資料があったが、今からできるとは到底思えず、見なかったことに決め込み、荷物をまとめ退社した。

電車の中で揺れる身体を、踏ん張ることもせず、ただただぼーっと移り行く景色を眺めたただだった。

「…結婚」

電車の中でぼつりと零れた二文字が、景色と共に後ろへと流れて行く。まるで、転げ落ちるように猛スピードで流れて行くので、身体

の中でゆっくり噛みしめることもできない。

頭を軽く振って切り替える。

朝井さんのあの態度も気になる。新見さんが話している間の朝井さんはなんともいえない表情を浮かべていた。苛立ちに近い様な。後悔？　？　？　敵意？

【まもなく、来宮駅。出口は左側でございます。お降りの際は足元にお気をつけてお降りください】

独特の声が車内に響き、姿勢を正す。

帰ってゆっくり休もう。

そう心に刻み、一度目をつむった。

- 12 (後書き)

遅くなりました。

誤字脱字ございましたら、感想または作者TOPの活動報告にてお願いいたします。

昨日の分の仕事が残っているので、朝は早くに出社した。

フロアには朝井さんだけが出社していたので、気まずさのあまり引き返してしまいそうになる足を無理矢理踏ん張り、深呼吸をする。

「おはようございます」

「あ、おはよう。…昨日はよく眠れた？」

肩を竦めて、わざと明るい雰囲気で話しかけていることがわかり、少しだけ気持ちが楽になった。

「…はい」

「理由は多分本人の口から話すと思うから言わないけど、里中さんにはちゃんと拒否権があるんだからね？ あんなわけのわからないことに巻き込まれる必要なんてないんだから！」

口調が段々、嫌悪感を含み始め、最後の方では少し声み荒げたので昨日の朝井さんの違和感を思い出す。

「…朝井さんは」

そう言うと、続きの言葉を紡ぐ前に後ろから大きな声で「おはようございますー」と社員の男の子が出社してきたので、会話は途切れってしまった。

朝井さんは、このわけのわからない話に反対なんです、と言っ言葉が無理矢理飲み込んだのは、結果としてよかったのかもしれない。

それから昨日の仕事に取り掛かり、有耶無耶な現状にパニックを起こす余裕もなく、昼休みに突入した。

「里中さん。ちょっといいかな？」

この既視感とは心臓に悪い、と悪態をつける暇もなく、既に私の背後に回り込んでいた朝井さんは私の肩に手を置きながら「会議室に」と、笑顔を浮かべながら言った。

昨夜同様、無言で後ろをついていくと、会議室には既に新見さんがスタンバイしていた。

「遅い」

開口一番の悪態に、目を瞠ると隣に立つ朝井さんは舌打ちを会議室いっぱいに響かせた。

「退社まで待てそうにないみたいだからお昼休みに呼びつけたんだ。ごめんね？」

「いえ、私としてもそわそわして仕事に集中できていなかったのだから……」

「ほら、連れてきたんだからお前話せよ。俺はまだ仕事があるから戻る」

そう言い捨てると、振り返ることなく会議室を後にした。

少し気まずい空気が流れ、どうしたもんかとうねると「座りなさい」という声が響いた。おとなしく新見さんと向かい合うように座ると

タイミングを見計らったように話し始めた。

「とりあえず、ここに署名して」

そう言つてスーツの胸ポケットから取り出した紙を広げると、そこには【婚姻届】と書かれてあつた。既に新見さんは記入していたようで、片側が埋められていた。

「判子がないので、持って帰つてもいいですか？」

「構わない。…それで、なにが聞きたい？」

サインさえしてくれれば、後は興味がないといったあからさまな態度に思わず苦笑してしまつた。

「えっと、そうですね…。結婚報告は会社にしなくてもいいんですよね？」

「…なぜ？」

器用に片方の眉にだけ、釣り上げさせた。

「えっと、期間が決められてましたよね…？ だったら、報告しないほうが、お互い良いのではないかと思つたので…」

「なるほど。それはどちらでも。君に任せる」

その言葉の裏側に「言つてもいいが、面倒を起こすなよ」という意味合いがあるように聞こえた。

「結婚式など、そう言つたことも無くていいですか？」

「…そんなことより、他に聞くことがあるだろ」

新見さんは呆れるように、ため息をこぼしながら言った。

「た、たとえば…？」

「こんなわけのわからん話を持ちかけてきた理由だとか、なぜ自分がだとか」

「はあ。教えてください」

「俺の噂は知っているか？」

そういわれ、一瞬脳が機能停止したようで、固まってしまったがすぐに動き始めた。

「すみません、噂には疎い方なので…」

「同性愛者だと、社内で噂になっている。もちろん、そんな性癖は無いし、事実無根だが、このままでは少し厄介な事になりつつあったので、今回このような提案を君に申し出ている」

「提案、ですか」

「ああ。それに…。君が選ばれた理由に突出するものはない」

「……はあ。そう、ですか」

どっちにしても答えになっていないのではないか。そう思ったが、そもそも理由なんてどうだってよかった。

「私は、どうしたらいいですか？」

「特になにも。上には俺から報告しておく。上の誤解さえ解ければその辺の社員の噂など、どうでもいい。君は特に何もしていい。会社を辞めても辞めなくてもそれもどちらでも。辞めたとしても給料と同じだけの金は払おう」

「…えっと、それはつまり。そのお金で別々の家で過ごすと言う意味ですか？」

「どう変換したらその答えにたどり着くのかは理解できないが、全

く違う。昨夜も言ったように、結婚に承諾してもらった以上、生活は共に過ごしてもらおう。こちらの親への報告も参加して貰う。ついでに今後の生活基盤だが、君は今どのあたりに住んでいるんだ？」

「来宮駅周辺です」

「申し訳ないが、俺のマンションに移って貰う。マンションは解約してくれ」

「え？ 解約、ですか？」

「ああ。何か問題でも？」

そういうと少し面倒そうに顔を歪めたので、一瞬ひるんでしまったが、いつあのマンションに戻るかもわからない曖昧な現状と、あの可愛いマンションを手放すことは抵抗があり、恐る恐る口を開く。

「いえ…。ただ、今のマンションの外観が可愛くて気に入っていたので…」

「それなら今のところまだ解約はいいだろう。他に質問は？」

あっさりと引き下がってくれ、私の意見も耳を傾けてくれる姿勢に、もう頭はピンク色に染まりそうだったが、この脳が使い物にならなくなっては台無しだと思い、必死に酸素を送り込み脳を働かせた。

「…いつから引越しますか？」

「今週の金曜日までに。解約する必要がある今、明日からでも少しずつ荷物をこちらに移動してきたらいい。家具などの必要なものはこちらで揃える。他には？」

「先ほど仰っていた、ご両親の報告って」

「それは、今週の土曜日か日曜日に。堅苦しく考えなくて構わない。他には？」

流れて行く会話にふと、本当に私はこの人と結婚するのだろうか、という疑問が浮かぶ。

「…いえ、特には」

「だったら、今日の終了時、社の前で待っていてくれ。荷物を運ぶのを手伝おう」

「え?! いえ、大丈夫です!」

「君は俺の家を知らないだろ。NO残業DAYの日でよかったな。手間が省ける」

そう言うとな見さんは席を立ったので、私も慌てて席を立った。

「では、夜に」

そう言うとな、朝井さん同様、一度も振り返ることなく会議室を後にした。

- 13 (後書き)

すみません。

読み直さずに投稿していますので、誤字脱字があるとおもいます。
報告していただけると助かります。

2011・0608・誤字訂正。

「えっと。まあ、こんな感じで結婚生活が始まったの」

既に空になったカップを両手でこね回しながら、向かいに座る漑に弱々しく告げた。

「え？　　終わり？！　バカにしてる？」

漑は大きな目を、こぼれ落ちてしまいそうなほど見開く。

「バカになんてしてないよ。事実を言ったただけで…。それにこのまま話し込めると終電がなくなっちゃうよ」

「え？　泊めてくれないの？」

確かに無理矢理こんな所に呼び出したのだし泊めてあげるほうがいかもしれない。終電は酔っ払いが多いし、定例会に参加している社員に会えば漑の立場もない。

「あ、うん。そうしたほうがいいね。私の服は小さいだろうけど、我慢してね」

「そんなのなんだっていいよ。それより、親との対面とかどうだったの？」

「新見さんの？　挨拶してご飯食べて義母とアドレス交換して終わった」

「厄介そうだった？」

「厄介？　特にそんな雰囲気はなかったけど？」

「そう。だったらなんだったんだろね。結婚を急いだ理由って。噂だって今に始まったことじゃないし。…そもそもこの話は謎が多す

ぎ！　なんで一個も質問してないの？！　いや、そもそも。なんでこんな胡散臭い話にOKしたの？　な、ん、で！？」

ヒートアップしていく澪を何とか宥めてから、考えてみる。

「お金に困ってたの？」

考え込む私に痺れを切らし、澪が切羽詰まったような声をだした。

「余裕があるほど貰ってはなかったけど、暮らして行く分には困らない程度にはちゃんとあったよ」

「じゃあ、なんで」

呆れるようにいて、理解できないといった表情で溜息と共に言葉を紡いだ。

「なんで、かなー？　家族がほしかったのかも」

そう答えてみたものの、今の自分と新見さんとの関係はお世辞にも家族と言えるような間柄ではなく、滑稽すぎる仮面夫婦になっていたのでお笑いだ。…いや、そもそも、当初はそんなこと考えもしていなかったはずだ。そんな綺麗な想いであつたなら、よかったのだけど。

「なに、アンタ。幸せな家庭築こうとしてたの？　新見さんと？」

考えられない、とデカデカと顔面に貼り付けた素直な澪に、居た堪れない。

「あたしも理解はしてたはずなんだけど、でも、根の部分では新見

さんと幸せな家庭を築きたいと思っていたんだと思う」

「なんで新見さんなわけ？ 結婚してくれる人だったら誰でもよかったの？」

「まさか」

思いもしない質問に反射的に答えた。その声は、思っていた以上に尖って自分でも驚いたほどだ。そこで、ふと、漣に言えていないことを思い出した。

「……恥ずかしくて言えてなかったけど。……私、入社当初から新見さんに憧れてたから……」

こんな恥ずかしいこと、目を見つめて言えるはずもなく。視線をコップに落とすと一瞬静寂が戻ったがすぐに割くような笑い声が響いた。思わず視線をあげると未だにヒューヒュー言ってる漣の姿が映った。

「ちょっと、なに？ その中学生みたいな態度は」

笑いながら息を漏らすついでに言葉を紡ぐ漣の姿に少し落ち込み、同時に苛立ちがわく。

「……そんなに笑わなくても。コーヒーのおかわりは？」

「はあー、笑った、笑った。あ、貰う」

ずいっとこちらに寄越したコップを受け取り、キッチンへ向かう。コーヒーメーカーの中には先ほどの残りがまだ二人分あったので、それをコップに入れて電子レンジで温めなおす。

「そつえば。新見さん遅いね」

「……多分夜中に帰ってくるんじゃないかな」

「ふーん。ま、家庭を大切にするような人間には見えないからね」

キッチンを挟むと、漑の声色が思いの外冷たく感じ、余計に落ち込んだ。そんなこと言われなくても知ってる、という皮肉をつい言葉に出してしまいそうになる自分が恐ろしく妬ましい。嫌い。こんな自分なんて。

コーヒーを持って戻ると漑は真面目な顔で「で？」と言った。

「で、って？」

「結婚。どうなの？ サトが新見さんのこと好きで、この胡散臭い話に尻尾振って飛びついたことはわかったけど、新見さんの方はどうなの？」

「酷い言い様。ほんとに私が困ること好きなんだね」

「うふふ、その困った顔みるとゾクゾクするんだよねー」

「…変態」

「どうもありがとう」

褒めてなどいないのに輝かしい笑顔を張り付け、嫌みたらしく言った。

「結局、職場にはなんて報告したの？」

「さあ？ 私の方は上司は知ってるけど、他の社員がいると話さないところを見ると、あんまり口外しないほうがいいのかな、と思って…」

「新見さん何考えてるかわかんないしなあ。あ、帰ってくるの遅いつて言ってたけど、どこでなにしてるの？」

「知らない。いつもいい匂いしてるから、どこかのホテルで生活し

てるのかも」

ホテルだといいいんだけどね、という皮肉は理性で飲み込んだ。それに、ホテルでも帰ってこないのであればどこでも一緒ではないか。

「はああ？！　なに、それ！」

静かな空間に、漣の透き通った声はよくとおり思わず目をつむってしまいたくなる。そんなことしても、逃げれるわけもないのに。

「…ねえ、サト。知ってる？　結婚って神に誓うんだよ？」

透き通る綺麗な漣の声。

いつもはその声を聞くたび、心が浄化されるような思いだったのに今、この美しい神のような声に咎められることはなんて残酷なんだろう。

私は神に誓える。

神に誓っても偽りの無い想いなのに。

どうして？

どうして！

「…だから、神になんか誓ってない」

囁いた私の声は、残酷にも美しいとはかけ離れていた。

世の中は美しいと誰がのたまったの？

どうして、私は神に誓ってはいけないの？

駆け巡る思考を振りきることなんてできないけれど、その思いを口に出すほど理性は腐ってはいなかった。

「婚姻届って、神に誓わないんだよ？」

笑って言ったつもりだったけれど、漣は表情を歪めただけで口を開こうとはしなかった。

「サトって、困った顔は可愛いけど、それは不幸が似合っつてことじゃないよ。なんか勘違いしてるみたいだけど、私は神でも天使でもないよ。…ま、さっきは天の使いなんて言っただけ」

そう言っただけをすくめる姿はいつものように優しく、照れ屋な漣だった。

「それもそうだね。なんか、暗い話になっちゃってごめんね？ 気分転換にお風呂入る？」

「そうだね。あ、この辺にコンビニとかある？」

「駅前に戻ればあるけど、どうしたの？」

「使用済みのパンツは抵抗あるからさ。サトのはさすがに入らないだろうし、コンビニで調達してくるよ」

「それもそうだね。一緒に行くよ」

「いいって。駅近いし、道も覚えてるから迷わずに行けるよ」

「そう？ それじゃ、その間にお風呂の用意しておくね。あ、漣。お腹は？ 宴会ではあんまり食べれなかったでしょ？ 何か食べる？」

「大丈夫。今食べちゃうとデブまっしぐらだから」

そう言うとカバンから財布と携帯だけ取り出して漣はコンビニ向かった。

湯船は朝の段階で洗っていたので、お湯をためるだけで準備は終わってしまった。溼の帰りを待つ間、何の気なしに携帯を開いてみるとそこに一通のメールが届いていた。開いてみると送信者が「新見誠」と表示されていた。

「な、なんで…」

震えてしまいそうな指を慌てて押さえつけてメールを開く。

今日は帰らない。

そう、一言書かれていた。

「今日は帰らない…」

言葉にしてみると余計に左胸に痛みが走る。

痛みが走ったところで、救われるわけでも、ましたや助けてくれるヒーローなんていない。

そう思えば一層左胸が痛みを主張してきた。追い討ちをかけるように鎖骨もきしきしと痛みを主張し出した。それはまるで、意地の悪い悪魔が徐々に息を止めていくような感覚。

「どうしろって…？」

身体は悲鳴を上げたって、脳は警鐘を鳴らそうとしない。
離れることなんてもとから選択肢に入っていないのだから。

泣き出しそうな症状に耐えきれず、携帯を手放し、両手で顔を覆う。

「大丈夫。帰ってこないだけ。仕事が忙しいだけ」

そんなわけない、と頭のどこかでわかっていてもわからないふりを
して、馬鹿なふりをしてみると少し楽になった。

《ピンポーン》

間抜けな呼び鈴が響き、顔を上げる。

「零だ」

そうだ。

今日は彼女がいるんだ。

急いでインターホンに向かう。

「い、今開ける！」

インターホンに向かって叫ぶと彼女はカメラの前でクスクスと笑っ
た。

「迷わなかった？」

「余裕。それにしても、コンビニのパンツってなんであんなにおばさんパンツしか売ってないのかな？」

「…若い子はパンツをコンビニで買わないからじゃない？」

「なるほど？　ちよっとお金に余裕があつて、一夜の過ちを犯しやすいOLをターゲットにしてるわけだな？　そう考えるとイヤミな奴らだな」

「ふふ、澪は普段すごいパンティだもんね？」

澪は以前、パンツの柄について熱弁を奮っていたことがある。そこで彼女はパンツに力を入れない女子は女子力に問題があると怒っていた。

「いつ披露するかわかりませんからね」

そう言う「見る？」と真面目な顔してスカートの裾を捲ろうとしたので丁重にお断りした。

「お風呂、出来たから先に入って。スウェットを入り口に置いておくからそれを着て。化粧落としはオイルタイプしかないけど大丈夫？」

「全然大丈夫。ありがとう」

「でわ、お風呂場にご案内いたします」

そう言うて澪の横をすり抜ける。

私はまだ大丈夫。

心が痛みを主張してきたところで、この生活から抜け出そうとは思えない。

新見さんの妻に執着している自分が汚らわしく愚かな行為に見えた

としても。

「今日はパジャマパーティーだね」

溼の声で少しずつ軽くなった気持ちは、なんて現金なんだろう。

15 (前書き)

遅くなってしまうてすみません。

漣をお風呂まで案内して、リビングに戻ると携帯が転がっているのが目に入った。そこでやっと返信をしていないことに気がつき、慌てて携帯を手にとった。

「漣が泊まること、話してなかった」

慌てて二つ折りの携帯を開いて見ると、新たに新着メールが届いていた。返信していないのに彼からメールが連続して送られてくることはないの、不思議に思いつつメールを開いた。そこには「新見 仁美」と表示されていた。

「お義母様…？」

春香さん。

夜分遅くにごめんなさい

春香さんにどうしても

お願いしたいことがあるの

このメールを見たら

何時でもいいから返信下さい

「私にお願い？ 珍しい」

そう零しながら返信メールを作成する。

お義母様。
遅くなっちゃって
申し訳ありません。
何かありましたか？

愛想のないメールかな？ とも思ったが、すぐに返信するほうが良いだろうと思い、送信ボタンを押した。続いて新見さんのメールにも「滞を泊めることにしました。事後報告ですみません」とだけ送った。お仕事がんばってください、と最後に付け足そうか迷ったが、文面からは皮肉にしか見えず、削除した。
新見さんにメールを送ってすぐに、お義母様のほうから返信があった。

春香さん。
返信ありがとう。
実は急なお話なんだけれど…
明後日の日曜日に簡単な
パーティーが催されるのだ
けれど、春香さんにも是非
出席してほしいの。
そんなに堅苦しく考えないで
ほしいのだけ…。
春香さんのお友達を呼んで

頂いても結構です。

詳しいお話は明日お電話しますわ。

とりあえず、明後日予定を空けておいてね。

メールはそこで終わっていた。

「パーティー…？ 明後日？」

あり得ないし。

「お先でしたー。あれ？ 何、固まってるの？」

呑気な澪の声に余計力が抜けた。

お義母さんのお誘いに困惑しながら事情を話すと澪は目を見開いてからぱちぱちと瞬きをした。

「パーティーってそんな急に呼ばれないでしょ。なんか怪しいな」

私が置いたスウェットを身に纏い、仁王立ちしている姿はなんとも滑稽で、少し肩の力が抜けた。

「怪しいって…。それより、参加することは決定ってことかな？」

「そうでしょ。メールでは空けといてって言われたんでしょ？ 新見さんは知ってるの？」

そう言われ、そんなこと考えもつかなかった自分の鈍さに悲しくなった。

「そう、だよな。新見さんにメール、すべきだよな？」

「……いや、ちよつと待って。お義母様が明日詳しく連絡するって言うてたよね？ 待ってみるのもありかも。今、遅いし」

うんうん、と頭を上下しながら言い放つ漑。どれが正解かもわからず、結局携帯を閉じた。

「それより、サトもお風呂入ってリフレッシュしておいでよ。その間、この豪華な液晶テレビを見ても？」

「あ、うん。テレビもそうだけど、冷蔵庫にビールとか入ってるから好きに使ってくれていいから」

「はい。あ、それと。我儘ついでに、化粧水貸してくれない？ コンビニ行ったのに買ってくるの忘れちゃって……」

「そんなの気にしなくていいよ。とってくるからまって」

リビングに漑を残し、自室に向かった。寝室は元々別なので、自室にはベッドとドレッサーが置いてある。そこから化粧水と保湿クリームを手にとった。殺伐とした自室に見て見ぬ振りをして、リビングに戻った。

「これ、使って。私はお風呂入ってくるね」

テレビの前に置いてあるソファーは大の大人が四人は余裕で座れるであろう存在感のあるもので、そのソファーにこれまた王様のように堂々と座る漑の姿が似合いすぎて見惚れつつ、スキンケアを手渡し、お風呂に向かった。

お風呂から出てくると、リビングからは清々しいほどの笑い声が聞こえた。気を抜くとすぐに沈んでしまいう気持ちだが、共鳴するように持ち上がる。この家で気持ちがあがるなんて。

「お待たせ。何見てたの？」

「お笑い番組。こんな大きいテレビで見ると迫力も違うね！ 私の家、まだ、アナログだから画質の綺麗さに驚いたよ」

「え？ まだアナログなの？ もうそろそろでしょ？」

「うん。でも買いに行くの面倒で先延ばしにしてんの。あ、ビールもいただいたちゃいました」

「いいよ。あたしも飲もう」

キッチンに向かい、ビールを片手に持って戻るとテレビの電源は消されていた。

「さ、始めますか」

ニヤニヤとだらしない表情を浮かべた漣がソファで踏ん反り返っていた。嫌な予感が頭を掠めた。

「な、なにを？」

「パジャマパーティーと言えば、そりゃ、ガールズトークでしょ」

ガールズって年でもないくせに、と言ってやろうかとも思ったが、なんだかドツと疲れたのでため息だけこぼした。

「部屋いく？」

「いいよ、ここで。ちょっと気になることもあるし…。さ、座る、

座る」

そう言つてパシパシとソファアを叩いたので、おとなしく隣に座つた。

「とりあえず。テーマは新見さんの好きなところにするか」

「なっ！ 何言つてるの！？」

「懂れつて、なんかきっかけがあつたの？」

興奮する私を見事にスルーし、冷静に質問を投げかけてくる澁に困つてしていると「あー、その顔！」と空いているソファアをパシパシ叩きながら興奮するのでなんとか冷静を装うことにした。

「きっかけは、入社してすぐの時。ちよつと問題が重なつて落ち込んだの。誰にも見られなくなつたから資料室でこっそり自分の世界に入つてたんだけど、新見さんが突然現れて『君はこの住人か？ 用もないのに住み着くな』って言われたの」

「…うん…？」

「…それが、きっかけかな？」

「どーこーがー？！ 今のどこに萌えたのよ！ ただの毒舌でしょ？」

「なに？ 俺様が好きなの？」

「俺様が好きつてわけじゃなくて…」

なんて言つたらいいのか自分でもわからず、またしても困つた表情を浮かべてしまった。

確かに、そんな一言で懂れて、こんな生活を送る引き金としては不自然かもしれない。それでも、なにかが引つかかったのだ。

「まあ、男の趣味なんて人それぞれだし私が口挟むことではないけど。三ヶ月間どんな生活だったの？ 休みの日とか」

「最初の一ヶ月は慣れなくてあたふたしてるか、生活用品を買いに出かけたりしてたらあつという間に。あ、ご挨拶もあつたし」

「そういえば、実家は近いの？」

「うん。車で30分くらい」

「なーんかなあ。そのトントン拍子が気にかかるなー」

そういうと、一気にビールを傾け、喉を鳴らした。

「もう一本飲む？ それか、日本酒か梅酒」

「冷酒！ 水割りで」

空になった缶ビールを高々と掲げ、宣誓するかのような姿に口元が緩む。

「ちょっと待ってて。瓶ごともってくるから」

そう言うのと濁は座ったまま器用に上半身をゆらゆらと揺らし、可愛いダンスを披露してくれた。

キッチンに行き、お目当ての日本酒とミネラルウォーターを手に取り、先にリビングに運ぶ。

「氷も持ってくる」

「お、サンキュー」

製氷機から氷を取り出し、魔法瓶に入れ、手近にあったコップを二つ見繕う。こうなると、軽いつまみもあればなおいいだろうと思い、チョコレートとナッツを小皿に盛り付ける。ついでに、トレーも引っ張り出し、トレーに乗せて一気にリビングに運んだ。

「わーお。豪華だねー。ありがとう」

「さ、飲もう！」

残しておいたビールを流し込む。少し温くなっていたが、温くなったビールはそれはそれで味わい深く、個人的には好んで飲んでいたので、漑は自分の水割りを好みの濃さで作っていた。

「そう言えば、漑はどうなの？」

ビールを片手に持ちながら、空いた手で目の前のテーブルにおいたつまみに伸ばす。ナッツを食べすぎるとニキビに繋がりが食べ過ぎは禁物だが、つまみがあればよりお酒が進み、気分があがる。魅惑的だ。

「あー。こないだの合コンのこと？」

「そうそう。先週くらいに行ってたよね？」

「行った、行った。…そっか。あの合コンの話してなかったんだ。

相手はね、大学生だったんだよねー」

「ええ?! だ、大学生?! ちよつと、それって犯罪…じゃない?」

「えー? まだ大丈夫だよ。高校生ならちよつとあれだけど。それに、大学生って言っても年の差は2、3歳だよ?」

可愛い顔を傾け、キョトンとした表情を浮かべる漑に、なんかあったな、と感じ取った。

「…もしかして…」

「永谷翔くん。22歳で、4回生」

「…なに? その紹介…。あ、待って! 怖くて聞けない」

「やだなあー。ちよつと仲良くなっただけじゃん?」

そう言つとケラケラと声をあげて笑い、水割りを流し込んだ。私も飲まずにはいられず、残りのビールを流し込んだ。温くなつていたからか、胃は思つほど驚かず、素直に受け止めていたのをいいことに、水割りを無言で作り、また流し込んだ。

「どんな子なの？」

「イケメン」

「それ、死語だよー。付き合つてるの？」

「付き合つてはないよ。とりあえず連絡はとつてるんだけど、学生だしなー」

つい先日まで会社の年下の男の子が言いよつてきて面倒だと言つていたのに、と思わないでもないが、澪は仕事もできるいい女なので、世の男性がほつとくはずもない。

「恋多き乙女でも若さには目が眩むのかー。その子に会つてみたいなー」

「別に多くないから！ ま、機会があればね」

「それはそれは。楽しみですこと」

くすくす笑つと澪は大げさに肩を竦めてから水割りを飲んだ。お互いの恋に、人には言えない悩みに、お酒で滑りのよくなつた口からぼろぼろと出ていった。それが時として心地良く、残酷な内容でも肴のあてに笑うのだ。女はなんて残酷で醜いんだろうと、頭の端で思いながら、コップを傾けた。

15（後書き）

反省、言い訳等は活動報告（*）にて。

（*）

私が読む側だった頃は活動報告という場があることを知らなかったのですが、作者様によつてはそちらでこっそり番外編や小話をアップしてくださるといったサービスもあるので（私はこまめに報告していないので大丈夫ですが、）是非チェックしてみてください。

16（前書き）

お待たせしました。

ほんと、亀更新でごめんなさい。

最高の時間を過ごしていたのに、お酒に飲まれたのか、いつのまにか寝てしまっていたらしく、ソファアの上で二人して転がっていた。まだ朝にもならない時間帯のようで、部屋の中もまだ暗く、起きる気がわからない。ふと、身体に毛布が包まっていることに気づいた。漣がどこからか漁ってかけてくれたのだろうか、と寝ぼけた頭で考えてから、また夢の中に落ちていった。

「サト。起きて」

漣の綺麗な声が覚醒しない頭に響き、心地よい感覚が身体中からむくりと湧き、身体を包んだ。そして、まだ寝ていたいと素直に思った。

「サトー。新見さんが」

「新見さん?!」

寝ぼけた頭でも《新見さん》という単語は鋭い矢のように頭にダイブした。そして、漣の言葉を奪うように声を荒げながら、勢い良く起き上がると、そこには昨夜の姿のまま、スウェットに身を包んだ漣と、清潔感のある無地のポロシャツにチノパンとラフではあるが上品さが滲み出ている私服に身を包んだ新見さんが立っていた。

一体、なにが起きたの？

「わお。寝起き可愛いね。その上驚いた顔を見せるなんて、罪な女」

甘ったるい台詞を吐く漑に思わず目を剥く。

「お前の頭は湧いているのか」

すぐさま新見さんが嫌悪の含んだ声をあげ、どうしたらいいのかわからず、反射的に立ち上がった。

「お、かえりなさい。あ、あの。朝ごはんは…」

「いただく。が、君はとりあえず着替えてきなさい」

はしたない、と言いたげな歪んだ表情に寝ぼけていたはずの頭がすぐに冴え、手足が冷めていく。固まる身体を慰めるように、漑が手を伸ばし「サト？」と声をかけてくれた。

「あ、漑の服も貸すから。こっちに…」

「工藤に入る服などないだろ。工藤は着ていた自分の服を着ろ」

確かに、身長も漑よりだいぶ低いし、体型だつて漑のほうがスレンダー。そんなこと今更考えずともわかつてはいる。わかつてはいるけど、遠回しに言われていることにおこがましくも傷ついていた。つた。

「…昨日の夜洗っておけばよかったね。ごめんね？」

「別にいいよ。そういえば、スウェットに着替える時、服を置いたままにしたのを忘れてた」

「あ、そうなの？ 気づかなかった。じゃ、脱衣所で着替える？」

「うん。そのまま洗面所借りるね」

そう言うと私の肩を軽くさすってからリビングから出た。漑の瞳が

いつもより慈愛に満ちていたからか、目頭が熱くなり、鎖骨が軋んだ。その痛みから逃げるようにリビングを出て、自室に逃げ込んだ。

着替えを終え、リビングに戻る前に洗面所に向かう。漑は歯を磨いている最中だったので、私も並んで歯を磨いた。

「朝ごはん食べていくよね？」

「えー。いいよ。せつかく二人なんだし。お邪魔虫は退散しますよ」

先ほどのやりとりを見て、聞いて、どうしたらその考えに至るのか是非聞きたい。

「まーた、困った顔しちゃってー。仕方ないなー。朝ご飯だけもらおうかな？」

私の困った顔見たさに言ったのかと疑いたくなったが、嬉しさが勝ち、我も忘れて抱きついた。

「ありがとう！ ちょっと待ってね！ すぐ用意するから！」

化粧もばっちりしたかったけど、新見さんも漑も待たせているのに呑気に化粧ができるはずもなく、最低限の用意をし終わるとリビングに向かった。

リビングに入るとテーブルで今朝の朝刊を読んでいる新見さんの姿が目に入った。邪魔にならないようにそっとキッチンに向かい、コ

ーヒーの用意から始めることにした。ちらつと時計に目をやるとまだ6時を少し過ぎた時間帯だった。そういえば、新見さんはいつ帰宅していたのだろ。そんな今更な疑問が浮かんだが、新見さんに聞いたところでどうにかなるわけでもないなと思い直した。

コーヒーマーカーがコポコポと音を立てながら黒い液体を作り出す。その様子をぼんやり眺め、出来上がると新見さんのマグカップに注ぐ。新見さんはブラックなので、ミルクや砂糖はいらない。マグカップだけをトレイに載せ、リビングに向かおうと一歩踏み出すと、これから新見さんと向かい合うという現実を改めて認知すると緊張と不安で手が震え、トレイとマグカップが安定せずカタカタと音をたてた。それはマグカップが私の逃げ腰に抗議するかのようで。

新見さんは、キッチンに入る前と同じ位置に座っていたが手元は新聞ではなく雑誌へと切り替わっていた。読んでいる最中に声をかけるなんて私にできるはずもなく、無言で目の前にマグカップだけ置いた。置く際に音が鳴ってしまい、新見さんは視線を雑誌からマグカップにあげたのち、私に向けた。

「…今日の予定は？」

私の予定なんて一度も聞かれたことがなかったので、驚きのあまり無様にも目を見開きながら「いえ」と一言こぼすのがやっとだった。

「母から聞いただろ？ その用意をするように言われている。出かける準備を。ついでに工藤も送ってやる」

何時の間にかリビングに入ってきていたらしい零に視線を向けた新見さんの後を追うように私も零の姿を捉えた。

「あ、本当ですか？ ラッキー」

すっかりメイクができあがった澪は弾む様に足取りは軽く、新見さんの前に座った。あまりのスムーズさに呆氣にとれた。

「コ、コーヒーいる？」

「もうー」

「澪は朝食和食派？ 洋食派？」

「取らない派。だからなんでもいいよ。あ、新見さんはどちらなんですか？」

「和食」

思いもしないところで彼の情報をゲットでき、口元が緩んだ。それに、ラッキーなことに昨日の晩ご飯用にと準備していたものが和食だったので、結果的に新見さんの好みを出すことができそうだった。

ホクホクとした心が伝わったのか澪はニヤニヤと笑ってこちらを見ていた。その瞳から逃げる様に「コーヒー持ってくるね！」と言ってリビングを後にした。

朝ごはんは、お弁当用に炊いていた残りの白米と晩御飯用に用意していた和食なので、それほど時間はかからず食卓に並べることができた。

「わお。朝から豪華だねー」

「昨日の残り物で申し訳ないけど」

「あ、そっか。昨日はいきなり誘ったんだっただ。ごめんね？」

「気にしないで」

「昨夜は、参加する予定ではなかったのか？」

無言で朝食をつついていた新見さんが、不機嫌そうに言い放ち、私はあたふたとしただけで答えられず、代わりに漑が話した。

「私は参加する予定でしたが、サトは昨日出勤してから私が誘ったので。そもそも定例会があるってサト知らなかったでしょ？」

「あ、うん」

「まー、私がわざとサトに情報いかないように手を回していたんだけど。そういえば、誰から聞いたの？」

漑の爆弾発言にツツコミを入れられる状況でもなかったもので、ここは大人な対応でスルーしてあげた。

「篠部君だよ。お昼食べたときに聞いたの」

「篠部か。なるほどねー」

何か思うところがあるのか、漑は一人だけニヤニヤと笑っていた。

「なるほど、なるほど。ところで、サト達は今日どうするんですか？」

「工藤、お前の口は閉じられんのか。それ以上話すなら、追い出すぞ」

ピリピリとした空気が漂い、その圧迫感にたじろぐ私を他所に、漑はケラケラと軽快に笑った。

「新見さん。追い出すはないですねー。サトはご飯食べたら用意できなよ。まだスッピンでしょ？」

「え、でも……」

「…すぐに出来る用意をしておきなさい」

新見さんの言葉に弾かれるようにして、席を立ちあがる。

「わ、わかりました！」

そう言って自室へと逃げ込んだ。

16（後書き）

やっと。

やっつと、話が進み始めました…。

もうじれじれ通り越してイライラな展開ですみません。
これからテンポアップできるように頑張ります。
ありがとうございました。

17（前書き）

大変お待たせしました。申し訳ございません。

メイクが終わり、カバンのなかに貴重品と携帯を入れリビングに戻ると、漑はテレビの前のソファに家主のように堂々と座り、朝の天気予報を見ていた。新見さんは雑誌の続きを読んでいるようで、テーブルから離れていない。

「お待たせしました」

テーブルに目をやると、朝食のお皿が綺麗に片付けられていた。漑が片付けたのだろうか？

「もう出る？」

漑がテレビから視線をこちらに投げながら聞いてきたので、その視線のバトンを受け取り、新見さんへ回した。

「ああ」

新見さんもしっかりバトンを受け取ってくれたらしく、雑誌をたたみ立ち上がった。

そんな仕草だけで、私の胸は高鳴ったのだから、自分はもうどうしようもないな、と呆れた。

「サトがデートかー。あたしも永谷くん誘ってみようかなー」
「なっ！」

またしても投じられた爆弾発言に目を見開いて驚いていると、私の言葉を奪うように「なんだ、工藤。フリーなのか？」と新見さんが

珍しく驚いた声を出した。

「ええ。私のような美人がフリーなんですよ。これが」

「絞殺されたいのか？」

「新見さんってホント、やな奴ですね」

「それはこっちのセリフだ」

一緒に仕事をした仲だからだろうか、漣と新見さんの親密度に胸がざわついた。痛みというよりも、砂のような重たくざらついた物が体内に蓄積されていくようだった。

「サト、早く行こう？」

漣は新見さんを、視界に入らない様に器用にこちらに歩み寄り、私の肩を触った。

「あ、うん……」

「…車を前まで回してくる」

そう言う和新見さんは先に出て行った。

「…ホントになんであんな奴と結婚したのやら。もし虐められたら今度からはすぐに、報告してね？」

両手で私の両肩を触ると、顔を覗き込む様にして言い放った。

私は頷くことしかできず、下を向いてこの嫌な感情から逃げ出した、と思っていた。

ロビーを出るとすでに新見さんが車を回してくれていたので、スムーズに乗車することができた。

漑と二人で後部座席に座ろうとしたが新見さんが「君は助手席に」と待ったをかけられ、素直に助手席に座った。確かに、漑を降ろした後、後部座席に座っているのはバランスが悪いだろう、と勝手に結論付けながら。

「工藤の家はどの辺りなんだ？」

「新松中です。駅近なんで、駅のロータリーで大丈夫です」

そう言うと、無言で車を発進させた。

「一声かけてくれることがマナーでは？」

漑の抗議もむなしく、沈黙で返された。その様子にむっとしながらも声を荒らげるような行動には移らず、「何か音楽かけない？」と言った。

「サトは普段、どんな音楽聴くの？」

運転席の後ろに座る漑は、助手席と運転席の間から顔をのぞかせ、聞いてきた。

「普段…。音楽には疎いほうだなあ。どちらかと言えば、洋楽のほうが多いかな？」

「クラシック？」

「まさか」

どんなイメージを抱いているか考えたくないが、クラシックは聴かない。こんなこと言っでは、いけないのだろうけど昔からクラシッ

クを聞くと眠たくなってしまったちなのだ。

「そう？　なんかサトに似合うと思ったんだけど。CDがないならラジオでもいいよ？」

CDがあるのかはわからないが、じつと黙って聞いていた新見さんが無言でラジオの電源を入れた。そこからは懐かしい洋楽がちょうど流れてきたので、口元が緩んだ。

「これ、なんて曲だっけ？」

「Oh, Pretty Womanだよ。映画の主題歌になったよね」

「あー、リチャードギアの？　あれは男前だったね。シャンパンに毒！」

漣は興奮するあまり、前の座席である運転席の背もたれをバシバシと叩いた。その行動にギョツとし、新見さんを覗くと、しっかりと眉間にしわを刻み、不満を露わにしてからラジオの電源を切った。

「えー。今からサビだったのにー」

その大胆な行動に私は驚きを通り越して嫉妬しそうで慌てて窓の外に視線をそらした。

嫉妬しそうです？　…白々しい。もうとっくに嫉妬心が燃えているというのに。

漣はラジオを消されたことに文句を言い放つと満足したようで、今日一日どう過ごすかということに心を躍らしていた。その様子に苦

笑しつつも相槌をうち、話に加わっているとあつという間に最寄り駅に到着した。そこで漣を降ろすと、車内は静けさと気まずさが漂った。私は特有の逃げグセから視線を窓の外へと向け、この現実から逃避することにした。が、すぐに新見さんの手によって現実に戻された。

「母から聞いたとおり、明日のパーティーに参加してもらう」

「はあ、」

「工藤など、友人を誘っても良いことになっているが、呼んだところで君はかまっていられないと思うので、誘わないことを勧める」
「そう言われ、私が新見さんの勧めを蹴るはずもなく、すぐに頷いた。

「何か欲しい物は？」

全く話の流れとは逸れた投げかけに、私は思わず新見さんをまじまじと見つめた。

新見さんが運転中で、こちらを見ないということがわかっていたということもあるが、じっくり眺められる機会に、存分に浸った。

「どうした？」

信号が赤になったのか、車は無音で止まり、眺めていた私と視線が合った。

新見さんの瞳は漆黑で美しく、眺めれば眺めるほど輝きを増すように見え、吸い込まれそうになった。近づいていってしまいそんな身体を理性で抑える。

何か話さなければ。
視線を外さなければ。

そういつた考えが頭をよぎったが、行動に移すことはできない。固まって眺めていると、新見さんの顔が徐々に近づいてきた。

いや、私が近づいているのか？

もう、なにがなんだかわからない！

パニックに陥る寸前のところで、後ろからクラクションを鳴らされ、驚きビクツと身体が反応し、前を見ると信号がいつのまにか青へと切り替わっていた。

未だに発進しようとしないうちに新見さんに、不思議に思いつつ「…信号…」と囁くと、盛大にため息を吐き捨ててからまた無言で発進した。

一体、なにが、どうなったの？

わからないが、新見さんをもう一度見る勇氣もなく、フロントガラスに映る風景をぼんやりと眺めていた。

暫く無言で車を運転していると、高級ブランドが立ち並ぶ通りでスピードを緩めた。お店の前に堂々と車を停めると、新見さんは無言でシートベルトを外したので、私もワンテンポずれながらも慌てて外した。

ここで一体なにが起こるのか、凡人の私には理解できず、ただただ新見さんの後を追いつ真似るしかなかった。

シートベルトを外すとドアを開けたので、私も慌ててドアを開け、降りた。

新見さん側は道路側で、降りるとこちらの歩道にまわった。

そんな行動をぼんやりと眺めていると、新見さんは何の迷いもなく私の隣に立ち、見下ろしていた。

「あ、あの？」

「お待ちしておりました。車をお預かり致します」

突然現れた給仕のような男性に私の弱々しい言葉は遮られた。新見さんは突然現れた彼に気に留めることもなく、躊躇いなく車のキーを彼に渡した。

「こつちだ」

新見さんは慣れているようで、私の腰あたりを軽く触れ、リードしてくれた。新見さんはラフな服装だというのに育ちのよさが前面に漂い、何を着ても上品でこんな高級シヨップに来ても馴染んでしまっている。が、私はシンプルなシフォンワンピースで、華やかさに欠ける上、チビで出るところが出ていない子供のような体型。そんな

女が隣に立つことによりこのスマートな英国紳士を邪魔している。自分のみすばらしさに恥ずかしくて、唇を噛み、俯いた。

「お客様？」

お店の人が心配そうに私に話しかけ、やっと自らの態度がまたしても新見さんに迷惑がかかっていると理解し、顔をあげ、固まっていた表情筋を無理矢理ほぐすようにして微笑んだ。お世辞にも綺麗な笑顔とは言えないものだったと思うが、お店の人は優しく微笑み返してくれた。

「本日はどのようなお買い物でしたっしょいますか？」

「これにパーティードレスを。略式で構わない」

「かしこまりました。では、こちらへ」

恭しい態度にいちいちビクビクしながら、彼の案内についていく。新見さんは、私につきつきりになるはずもなく、彼が登場すると自分の役目は終わったかのようにぷいと離れて行った。

「あ、あの…」

「はい。どうかいたしましたか？」

「い、いえ…」

「では、こちらでサイズを測らせていただきますので、中の者に引き継がせていただきます」

そう言うとは彼は礼儀正しく上半身を少し傾け、ピシッと頭を下げ、軽やかにフェードアウトしていった。

その優雅な動作に呆気にとられながらも、気を持ち直し、前を見据えると、綺麗な女の人が笑顔で迎えてくれた。

「本日はご来店ありがとうございます。担当を務めます、本間と申します。宜しくお願い致します」

本間と名乗った彼女もまた、綺麗な角度で頭を下げ、ビシッと数秒止まった後、すつと頭を元に戻した。上げられた表情は綺麗な笑顔のままで、そこに上品さが漂っていた。

「…里中 春香です。宜しくお願いします」

旧姓を名乗るか迷ったのは一瞬。

新見さんのエスコートでここまで来たが、《新見》と名乗ることは、私みたいな小娘にはおこがましく感じ、旧姓を名乗った。本間さんは、笑顔を曇らせることなく、「里中様」と優しく声をかけてくれた。

「サイズを測らせていただきますので、こちらのフィッティングルームへお越しく下さい」

そう言つて本間さんの後ろにあつたキラキラと光った全面鏡の扉をゆつくりと開けた。そこは、三面鏡が施してある部屋で、広さはざつと見ても8畳はあり、フィッティングルームとしては広々としすぎた部屋が視界にひろがった。

「そのままお入りください」

につこりと微笑む本間さんに、促されるように中へ入るが、目のやり場に困り俯いた。

「では、測っていきますので、楽にしてください」

そう言われても、とは言えず苦笑しながらも「はい」と答えた。

「なにかご希望などはございますか？」

サイズを測り終わると、本間さんがおずおずとでもしっかりとした声で言った。

「その…。私、パーティーに出席したことがなくて、よくわからないんです」

なんと恥ずかしいだろう。

新見さんの仮の嫁という仮面は隠せたにしても、連れという現実からは逃げられず、どちらにしても恥をかかせてしまうことにはかわりない。それなのに、うまく答えられない自分が恥ずかしく、堪らなく嫌気がさす。

「では、好きな形や理想のドレスなどはございますか？」

ほっておくと頂垂れてしまう私を元氣付けるように、本間さんの優しい声が響いた。

「えっと、できればロングドレス以外が…」

「畏まりました。他にはなにかございますか？」

「すみません。何も知らなくて…」

「いえ。里中様が謝られることはございません。では、新見様と一緒に選んでみてはいかがでしょう？」

につこりと微笑んだ本間さんの表情が、何か、企てているようです。

ぐに反応できなかったが、ワンテンポ遅れて「…はい」と答え、フイッティングルームをあとにした。

フイッティングルームをから出ると、来た道とは逆に進んだ。この先にもまだ豪華な部屋が隠されているのかと思うと衣装代が気になって仕方が無い。現金は申し訳程度にしか入っていないので、確実にカード払いになるだろう。それも、分割。そこまで考えてから軽く頭を振った。今はそんなこと考えても仕方ない。

「里中様」

本間さんは、焦げ茶色の木製のドアの前で止まった。

「こちらでございます」

そう言うときという不快ではなく、味のある独特の音を伴って開けられた。通された部屋は全体がロココ調で、貴族の部屋といった印象。部屋の真ん中にあるセンターテーブルもそれを囲う椅子も猫脚で可愛らしく立派に並んでいた。

「新見様は、少し席を外されておりますがすぐに戻られるそうです。掛けてお待ちください」

「あ、ありがとうございます」

そう言われ、一番ドアに近いふかふかの猫脚のソファ―椅子にゆっくりと体を沈めた。本間さんはテーブルを挟んだ向かいの椅子に座りにつこりと微笑んだ。

「お待ちの間に、何かお飲み物をお持ち致します。なにがよろしいですか？」

「お、お構いなく」

堅苦しい会話のやりとりに緊張は和らぐこともなく、徐々に増していた。そんな私の情けない姿にも本間さんは嫌な顔せず、にっこりと微笑んでくれた。

「緊張、しますよね」

「…はい。すみません」

「いえ！ お気になさらないください」

そついうと本間さんは視線を私の足もとへ落とした。

「里中様はシンデレラサイズなんですね！」

突然の単語に頭はついてこられず、ポカンとしていた。

「シンデレラ？」

「あ、すみません。興奮してしまって。靴のサイズが、20cmから22.5cmまでのサイズをシンデレラサイズと呼ぶのですが…。里中様はシンデレラサイズですよ？ 私は足のサイズも無駄に大きくて、とても羨ましいです」

嫌味のない笑顔に、先ほどとは異なる少し砕けた口調に肩の力ほんの少し弱まった。

「…私は小さいサイズばかりで嫌です」

この身長も足も手も、何もかも。

「あら。そうなんですか？ ふふ、お互い無い物ねだりですわね」

口元に手をあて上品に微笑った。

《コンコン》

木製のドアだからか、小気味良い音が響き、反射的に顔をそちらに捻る。視界の端で本間さんが立ち上がる姿が映り、視線はドアのままにして慌てて立ち上がる。

背後で「はい」と応える本間さんの声に続き少し低めの男性の声で「失礼します」と続いた。

先ほどと変わらない、ギーと言う効果音と共に開かれたドアの向こうからは新見さんとパリパリのスーツを着た青年が立って居た。スーツは上品でしっかりとアイロンが施されたところをみると気品を感じるが、彼の初々しさが放つオーラからどうしても男性というよりは好青年に見える。

「遅れて済まない」

圧迫感はあるが、どうしてか嫌に感じない。新見さんの魅力のひとつだ。

「お待ちしておりました。こちらへ」

本間さんに視線を戻すと、差している腕の先へ視線を流すと私の隣の空いたスペースだ。ギョツとして本間さんを見入ったが、やはり笑顔でドアのほうを見ていた。

「…ああ」

新見さんも特に気にした様子も見せず、私の隣へすんなり腰をおろし、つられるように私も腰をおろした。

「それでは。ドレスなんですが、里中様は顔がどちらかと言えば、かわいらしい印象ですのでロングドレスよりもひざ丈のドレスがよろしいと思うのですが、新見様は何かご希望ございますか」

「ない」

「では、こちらで見繕ったものが何着かございますので、まずはそちらでイメージをされてみるのも良いかと思います。…榊君、お願いします」

ドアの横で立つて居た好青年が、壁に近づき照明のスイッチのようなボタンを押した。すると無音で壁が開放され、向こう側から何着ものドレスが吊るされて居た。

「か、壁が…」

「元々薄いカーテンのようなもので仕切っただけですので、そちらをサイドに束ねただけでございます」

本間さんが答えてくれたが、そんな雑な説明で納得できる光景ではなかったが、お金持ちにはなんだってできるんだ、と思うようにし無理矢理納得させた。

「いかがですか」

並べられたドレスは多岐に渡り、どれも美しかった。が、その中でも、淡いピンクでふんわりとしたAラインのドレスに目が留まった。そんな視線を感じ取ったのか、本間さんはニコニコしながら口を開

けた。

「…右から二番目のドレスなんていかがですか？ 淡いピンク色で可愛い印象ですがネックラインのベアトップとなっておりますのでセクシーなデザインでございます。素材はサテンとオーガンザとなっております、上品な光沢が放ち、肌触りも良いものがございます。女性らしさが際立つドレスとなっております！」

本間さんは興奮しているようで、力強く言い切った。

「えっと、でも、すこし露出が多すぎませんか？ 背中が異常に開いているみたいですし…」

「そんな！ 出さないともったいないです。もしくは、ボレロを羽織ってみてはいかがですか？」

「ボレロ…」

そうは言っても、ぱっくりと背中全体が開かれているドレスなため、ボレロで隠せるとは思えない。

何か策があるのかもしれないが、そのぱっくり空いたドレスを着るのはなんだか恥ずかしく、うーんと唸った。

「新見様はどう思われますか？」

にっこり微笑んで新見さんと向き合ったのは本間さん。恐ろしい質問を難なく投げかけられる接客技術…いや、対人スキルに驚きながらも新見さんの方を見ることはできなかった。

「……君が気に入ったのなら」

なんだっていい、という一言を飲み込んだのだろうか。

私にはわからない。

「あら。新見様、ここははっきり言っていただかないと女性は決められませんわ。それに、里中様も新見様の好みのドレスをお召しになりたいですね?」

本間さんの迫力に負けるように小さくうなずいた。

「に、新見さんは…」

新見さんは、あからさまに眉間にしわを寄せ、嫌悪感を顔いっぱいに表示し、ため息を吐き捨ててから口を開いた。

「…左端のドレス」

左に目を向け、ドレスを見つけた頃本間さんの説明という名の演説が始まった。

「Aラインのチュールドレスですね。ひざ丈のデザインが可愛らしく見えますが、裾部分をシックで上品なブラックで引き締めています。おとなっぽくなりすぎないよう、上半身の淡いピンクの下地が緩和しております。ネックラインはハートカットでセクシーさ、ウエストにあるリボンのベルトがキュートさを表現したデザインでございます。新見様、さすがです。あちらのドレス、いかがでしょうか。試着してみますか?」

「い、いえ! 試着は結構です! あ、あのドレスで大丈夫です」「畏まりました。では、サイズを見て参ります。此方でお待ちになられますか?」

「いや。少し出る。その間に適当に鞆も見繕っていてくれ」「畏まりました」

新見さんは本間さんを見ずにずっと席を立ちあがり、ドアに向かうとしたので、私もあわてて立ち上がり後に続く。ドアの前では好青年が小気味いい音と共にドアを開けてくれた。

19（前書き）

遅くなりました。すみません。

お店を出るとすでに車が前に停まっており、その前にキーを預けた男の人が立っていた。

「歩いていくので、まだ預かっていてくれないか」

「畏まりました」

男の人はまたしても優雅に上半身を折り曲げた。

「こつちだ」

そんな男の人の姿に気にも留めず、新見さんは一人歩き出した。足の長さからか私よりも2、3歩先を行く新見さんに何か声をかけようと思ったが、ついていくことがやっとの私に話題を考えるスペースは既になかった。

高級店が立ち並び通りを5分ほど進む一度とまり、私が追いつくとまた腰に手をあて、店の中へ入った。そんな行動一つ一つに、馬鹿正直に高鳴るこの心臓が間抜けだった。

店内は白を基調としており清潔感白が店全体を覆っていた。そんな店内には至るところにガラスケースが並べられていた。

「いらっしやいませ」

黒いパンツスーツを着た可愛い女性が、その姿にふさわしい声

で言った。

愛されるために生まれてきたような女の子だな、なんて考えながらぼんやり眺めていた。

「君が担当をしてくれるのか？」

いつになく優しい声音で店員さんに言うものだから思わず顔をあげ表情を確認してみる。

そんな行動に気づいたのか一瞬こちらに目線を落としたがその瞳に優しさは含まれておらず、じつくり見ることもできないまますぐに視線は流されてしまった。

「はい！ 本日はこういったものをお探しですが？ プレゼントでしようか？」

にこにこ微笑む店員さん。

私よりも年下に見える店員さんは、珍しく愛想のいい新見さんに魅入っているらしく私を視界に入れていない。そんなことも今更で、たまたま新見さんの態度が彼女に向いているだけ。私にその優しい声音で囁いてくれることもない。この状況に拗ねることもできない。彼の裾を掴むような可愛らしさもない。もちろん涙を流すことも。

「これにネックスレスを」

「…畏まりました」

そこでやっと私の顔に視線を向けたが、視線を上から下へと落としてからにつこりと微笑んだ。その笑みはあからさまに勝者の笑みだった。

「その前に、前田を呼んできてくれないか」

圧迫感の無い声は、普段聞いている声よりも色気が漂っていて、気を抜くと自分でもわけのわからない行動をとってしまいそうになる。

「…前田、でしょうか？」

「ああ。早くしてくれないか」

「畏まりました。では、そちらに掛けてお待ちください」

そう言う可愛い店員さんは頭を下げ、奥に消えていった。その姿を見つめてから、新見さんは勧められた椅子に座ったので、私もウンテンポずれた隣に座った。

「…君は何か主張というものがないのか」

呆れたように、ため息とともに吐き捨てられたセリフに言いようのない痛みが身体全体に走った。いや、痛み、というにはどこか違和感はある。泣き出す一歩手前のような苦しさだった。

「…新見さんにはわかりません」

私の気持ちなんて。

そんな一言を感情に任せてこぼしてしまいそうになるが、その手前で「あら」というこの場に似合わない陽気な声で遮られた。

「新見君じゃない。いきなり呼び出し食らったって聞いたから来てみたら。どうしたの？」

「…前田に頼みがあつてな」

現れた女性も先ほどの店員さん同様、黒のパンツスーツに胸のところにネームプレートが付いており、『前田』と書かれていた。

「また？　って、なに！　このお人形さんみたいな可愛い子は！」

前田さんは、私の存在に驚いたようで、新見さんに向けていた視線を完全にこちらに向けた。

「…お前、相変わらず煩いな」

「はじめまして。わたくし、前田と申します」

新見さんの言葉を聞こえないような素振りで細い上半身を優雅に折り曲げた。その姿は本間さんと似た空気を感じ、背筋を伸ばした。

私も名乗ろうと、椅子を引いたがその動作を制するように新見さんが声をあげた。

「勝手に自己紹介を始めるな」

「何よ。なんで新見君がこんなかわいいこちゃんを…。そもそも、どいう関係なのよ」

「新見　春香」

「…妹？」

「お前、わざとだろ」

「だってこんなかわいいこちゃんが…。春香さん、ほんとにこんな男と？」

「あ、の…？」

「黙ってる。…それより、アクセサリーを揃えてやって」

「畏まりました。では、新見様、こちらへ」

前田さんはスイッチを切り替えるように、仕事モードに切り替わった。私を立ち上げるために手まで差し伸べてくれた。その王子様のような仕草に恥ずかしさから頬が染まるのが自分でもわかった。

「ドレスはご用意されましたか？」

「あ、はい」

「どのようなドレスか教えていただいてもよろしいですか？ ドレスに合うアクセサリをご用意いたしますので」

「は、はい。ドレスはAラインのチュールドレスで、色は黒メインです。上半身は黒のレースの下が淡いピンクの生地が見えます。それから…ウエストラインにリボンがついてます」

先ほどのドレスを思い出しながら答える形となり、要領を得ない言葉の羅列だが、前田さんはニコニコと微笑んでいた。

「畏まりました。セクシーというよりはキュートよりのドレスですね。春香さんにお似合いだと思います。いくつかお持ちいたします。少々お待ちいただいてもよろしいですか？」

「は、はい。よろしく願います」

前田さんは柔らかな笑みを浮かべながら、お店の中を歩き回ったり、奥に消えたりしてからまたすぐに戻ってきた。

手際良く目の前に並べられたアクセサリは、高価で私のような平凡な女が付けると浮いてしまいそうなアクセサリからシンプルで可愛いアクセサリまで幅広く揃えられていた。

「何か、目に止まるようなものはございましたか」

ピンクゴールドのネックレスに目がとまった。トップの部分はハート型のダイヤモンドが輝いていた。ピアスもおそろいで揃えられて

いた。

「…この、ピンクゴールドの」

前田さんは手袋をはめ終えた手でそのネックレスを手にとった。

「着けてみますか？」

控えめなダイヤモンドの光がとても可愛いと思い、素直に頷くと首にあてがい、鏡の前で眺めた。

「とてもお似合いです」

お世辞だとわかっていても、口元はほころんだ。

「それをいただく」

いつの間に背後にいたのか、新見さんがそう言ってしまい、慌てて断ろうとしたが前田さんが「ありがとうございます」と先ほどとは違った、意味深い笑みで応えた。

「カード払いにしますか？」

「ああ」

「あ、あの！ 自分のものは自分で払いますから」

「あら。春香さんったら。ここは男が払ってこそこのダイヤモンドが輝きを放つのよ？」

砕けた口調に妙に説得力のある声で「本当ですか？」と言ってしまいそうになる。

「君が気にすることではない」

そう言うカードを取り出した。

前田さんのスムーズな手続きでサインまでしていた。

「すみません」

お金が無いと思われているのかもしれない。確かにお金持ちでは無いけれど、貯金だってあるし、つい先日、あのお気に入りマンションも手放したところだった。あの可愛い洋館に戻る機会も無いし、維持費も馬鹿にならない。それなら、この生活中に貯金をして、新見さんからお払い箱にされてからマンションをまた探せばいいと思い直したため、手放したのだった。

「春香さんだったら、可愛いね。そこはありがとうって笑って言えばチャラよ。男なんて」

果たしてそうだろうか。

新見さんは私の笑顔をみると余計顔を顰めそうだ。

「……ありがとう、ございます」

それでも、買ってもらったのだからお礼を言わなくてはと思い頭を下げた。目の前の前田さんは「笑顔がないわね」とクスクス笑いながら、それでも満足そうに言った。

「それでは、またのお越しお待ちしております」

入口で可愛く包装された商品を手渡され、見送られると前田さんは畏まって言った。

新見さんはその様子を見ることもなく、呆気なく店を出た。

「あ、ありがとうございます」

すぐに見えなくなる足取りの新見さんに遅れを取らないよう、早口で言い分け、私もお店を出た。視界の端で、入店時のあの可愛らしい店員さんの刺すような視線を感じたが、構っている時間も考える時間もなかった。

新見さんに追いつくとタイミングよく声をかけられた。

「店に戻る」

「あ、はい」

その言葉を合図にドレスを買った店に戻ると、既に本間さんが待ち構えていた。

「鞆はこちらをご用意しました」

そう言って渡された鞆は側面に薔薇があしらわれたシャンパンゴールドのクラッチバッグだった。

「す、素敵です」

感嘆の声をこぼすと、本間さんはほくほくとした笑顔で見つめ返した。

「気に入っていただけて光栄でございます」

「では、まとめてくれ」

「畏まりました」

本間さんは鞆を持ち、「失礼します」と言って離れた。その姿を見るとまた、新見さんは財布を取り出したので慌てて遮った。

「に、新見さん！ 私にも払わせてください」

あまり大きな声で抗議することは、新見さんの外聞もよくないかと思いい、小声で言つと、一瞥くれるだけで、財布をなおしてくれる様子はみせない。

「新見さんー」

泣きそうになりながら縋ると、本間さんが現れ、「お支払いはカードでよろしいですか？」と言った。

「ああ。…君は、外で待っていてくれ」

これ以上の抗議は一切受け付けないと瞳が語っていたので、仕方なく引き下がる。

お店の前に出ると、入店する時には無かった新見さんの車と、キーを預けた男性がにこやかな表情で立っていた。

「お帰りですか？」

この暑苦しい天気によられることもなく、涼しげに言い放った。

「えっと。今、お支払いを」

しどろもどろになりながら、わけのわからない応えをこぼすが、彼は柔らかな笑みを浮かべただけで特につつこんだ質問はしてこなかった。さすが、サービス業！と拍手を送りたくなるほどの対応だった。

「待たせた。車に乗って」

背後から威圧的な声をかけられ、背筋を伸ばし、にり返ると大きな紙袋を提げた新見さんが、爽やかに店から出てきていた。

男性からキーを受け取り車のトランクを開け、その大きな紙袋を仕舞い込み、運転席のドアの前に移動した。

「乗って」

その一言で自分が固まって立っていたことに気づき、慌ててドアを開けた。

新見さんも後を追うように運転席に滑り込み、合図もなしに車を発進させた。

慌ててサイドミラーで確認すると男性が頭を下げた状態で見送っているので、申し訳ない気持ちにメキメキと育ち、車内で頭を下げた。

次に連れてこられた場所も高級そうなお店で、これ以上何を買うんだと問いただしたい気持ちだった。

「いらつしやいませ、新見様」

「遅れてすまない」

マダムという単語が似合う上品な女性が迎えてくれた。マダムは私たちを近くの椅子に腰掛けるよう勧めると、奥に消え、箱を持って現れた。

「商品はこちらでお間違いないですか？」

目の前に見せられた商品は、光沢のある黒いパンプスだった。シンブルなデザインではあるが、高いヒールと靴底の赤が存在感を現していた。

「ああ。履いてみて」

そう言われ、試着してみるとサイズまでぴったりで驚いた。

「踵は痛くありませんか？」

「大丈夫です」

「畏まりました」

マダムはパンプスを箱に仕舞うと、にっこりと微笑み、「とてもよくお似合いました」といかにもなお世辞を口にしてから席を立った。あとは流れるように、また新見さんに支払われ、これは賤別品かなにかなのか、と諦めに似た感情がぐるぐると頭の中で駆け巡っていた。

そのお店をあとにした頃、時間は既に夕方になっていた。

20（前書き）

す、すみません！

すっかり遅くなってしまつて…

誤字脱字あると思うのですが、取り合えずアップしときます…！
大変！お待たせ！しました！！

お店を出てからも無言で運転し続ける新見さんに、この先どこに向かっているのか聞くタイミングを失っていた。マンションのある方向とは逆であることは気づいていたので、まだ何か用事があるのかな、と考えるのがやっとだった。

そんな中、静まり返った車内に私の腹の虫が怒りの抗議を申し出たのは、仕方ないことだったと思う。

「すみません！」

「昼、抜いたことを忘れていた。すまなかった」

「…新見さんは普段からお昼、食べないんですか？」

ふと、昨日の朝井さんのお弁当発言を思い出した。

「ああ。必要性を感じない」

そうはつきり言われてしまうとそうですね、と頷いてしまいそうになった。そんなことをしてしまうと後々あの嫌味な上司に何を言われるかわからないので、なんとも言えず、反応に困っているとそれが空気から伝わったのか新見さんは私の方を見ずに「飯にしよう」と提案してくれた。

カジュアルな服でも入れ、それでいておしゃれなイタリアンに連れてこられたのは、人生で初めてだった。

そもそも、高級なお店でドレスを買ったこともなければ、アクセサ

リーやパンプスも買ったことがない自分はつくづく新見さんに似合わない女なのだと改めて実感させられた気分だった。お姫様気分と言ったら聞こえはいいが、成金風情のシンデレラ酔いといった方が私にはお似合いな気がした。

「ワインは？」

「大丈夫です」

新見さんが運転で飲めないのに目の前で飲めるほど神経が太くはないので断ると、じつとみつめられた。それは、真偽を確かめているかのような仕草だった。

「…それなら、いいが」

メニューを適当に見繕い、注文し終わると、会話は一切止まった。静寂に負けないよう唾をのみ、思い切って口を開ける。

「あ、あの。今日はいろいろ買っていただいてありがとうございます」

「気にしなくていい。明日はこちらの事情で巻き込んでしまっただから」

「そのパーティーのことなんですけど…。お義母様から詳しい説明があると聞いていたんですが、まだ連絡がなく、どういったパーティーか知らないんです」

「母には俺が話すと言って断って置いた。明日のパーティーは、ちよつとした顔見せだ。親との会合はあったが、他の者をまだ紹介していなかっただろ？」

他の者？ 紹介？

頭の中で混乱し始め、何から聞けばいいのか判断がつかないところに前菜がテーブルの上におかれた。

「詳しいことは、明日わかる。君は何も気にしなくていい」

そう言うと、前菜に手をのばしたので、つられるように私もフォークを持った。

色とりどりのサラダに生ハムが覆いかぶさった前菜は生ハムの塩気とほんのり香るゴマのドレッシングが上品で、無言で味わった。私の様子を時々伺っているかのように視線を投じてくる新見さんに気づかない振りをしているとあっという間に前菜は食べ終えてしまった。

次に出てきた料理は白身魚のポワレ。ソースはアンチョビベースでペロリと平らげた。

そして、主菜は若鶏と彩り野菜のグリル。新見さんは、大トロサーモンのオープン焼き和風ビネグレットソースとなんともおしゃやかなものをチョイスしていた。

仲の良いカップルのように一口交換なんて制度が私たちの間にあるはずもなく、黙々と頼んだ料理を口に運んだ。途中で何度か焼きたてのパンが入った籠を持ってきてくれたので、その時に少し声を発するだけで、あとは終始無言のディナーだった。

そろそろデザートか、という頃合いで新見さんはデザートを断り、私だけが食べる羽目になった。

「少し席を立つが、君は最後まで楽しみなさい」

そういつて、優雅に立ち上がり、奥の方へ姿を消した。そこで漸く、新見さんとこんなにすっかりディナーをしたのは初め

てということに気づいた。この三ヶ月近い時間を私は一体何をして
いたんだろう。

出てきたデザートはパンナコッタで、周りに季節のフルーツがゴロ
ゴロと転がっていた。

「…美味しい」

こぼれた感想に反応してくれる者は誰もいない。そんなことにも、
いちいち胸が痛みを主張してくる。

そんな感傷に浸りつつデザートを食べ終え、重たくなった胃を撫で
ていると何食わぬ顔で新見さんが戻ってきた。

「君に渡しておくものがあつた」

お皿を下げられたテーブルは妙に広く、向かい合っているはずなの
に、その距離はとても遠く感じる。

その広いテーブルの上に小さな黒いケースを置いた。

「明日のパーティーにつけておくように」

そう言つて小さな箱を開け、見せられる。中身は控えめのダイヤモ
ンドが付いた指輪だった。

どうして。

そんな感想が、こぼれてしまいそうになり、慌てて唾と共に飲み込

む。

「…サイズが合うか、はめてみてくれ」

その声には面倒そうに、けれど拒否権を認めない意思のある声音で、言われるままケースを手を持ち指輪を取り出した。

ここで、新見さんにはめられたらどんなに幸せだろう、なんて乙女で夢見がちの妄想が過ぎり、思わず苦笑を浮かべた。

「…サイズは問題ありません」

「デザインについては目をつむっていただけると、嬉しいのだが」

私の棘のある発言に気づいたのか、すかさず反論してくる新見さんに、デザインも何もかも私の好みすぎて嫌味ですか、と言ってやりたい。

「それと。右手ではなく左手に」

「…明日、ですか？」

まさか、今ではないですよ？と続けてしまいそうな棘のある声音に自分で驚いた。が、新見さんは特に気にする様子もみせない。

「ああ。用事は以上だ。今日は俺の実家に泊まってもらっ」

そう言われ、確かに新見さんの実家の近くに向かっていたな、と気づいた。

「わかりました」

指輪はその場で外し、ケースにしまった。新見さんは無言でその様子を眺めるだけで特になにも言わなかった。

鞆にしまい込むと、新見さんは席を立ち、店をあとにした。その間も終始無言で、私は何か不愉快にさせたのか、対応が悪かったのだろうか、そんなことばかり考えていた。見当違いで馬鹿な思考に囚われている。

「明日の準備で少し騒がしいかもしれない」

車内で発せられた言葉の意味がわからず、ぼんやりと外の景色を流し見しながら、当たり障りない返答しか返せなかった。

そういえば、新見さんの実家に足を運ぶことは初めてだということに気づいたのは、実家につく少し前だった。

「あ、あの！」

「なにか？」

「ご実家に伺うのは初めて、です。手土産など持たなくて大丈夫なんでしょうか…。それに、こんな夜分遅くに…」

家に伺っても良い時間はとっくの昔に過ぎていた。

そんな私の問いに新見さんは綺麗に顔を歪め「なにを、いまさら」と悪態をつけそうな、そんな表情を浮かべた。

「…気にしないでいい。明日の準備で挨拶をする暇もない。君は寝に行くだけだ」

「そう、ですか」

そこで会話が止まり、少しすると大きな家の前で車が停車した。

「降りてくれないか？」

車が止まり、ここが新見さんの実家か、なんて思いに耽っていると呆れたように促され、慌てて車から降りた。

私が降りるとまたすぐにエンジンが音を出し、すぐに離れた。

視線を家へむけると、自然と口が開き感嘆とも取れる吐息が漏れた。

「…まるで、海外ね」

赤い煉瓦で囲まれたレトロ調で塀からはポコポコと飛び出していた。

その奥に白を基調とした輸入住宅のような綺麗な家が見える。

入り口の横にガレージがあるようで、そちらのドアが自動で開かれ、そこに車を駐車すると飄々とこちらに戻り、入り口の可愛い門を開けた。

赤い煉瓦で囲われていた世界は想像通りの異空間で、柄にもなく胸がときめいた。ここは本当に日本なのだろうか。

左右に広がる庭には白いテーブルと猫足の椅子が並べられていた。

「明日の昼間はここで開催されるようだな」

ぽつりと呟いた言葉に反応するように、新見さんに視線を投げた。

「お昼から、あるんですか？」

「ああ。昼間からワインやらシャンパンが並ぶだろうが、君は夜まで参加するのだから飲み過ぎるなよ」

「はい」

お付き合い程度には昼間からも飲むのかと察したが、明日のパーティーが自分とは無縁すぎて全貌が掴めずにいると、新見さんは間抜けな私をおいていくようにスタスタと庭を抜けるように歩いた。

広々とした庭を抜けるとやっと玄関が見え、ドアに可愛らしいお花の柄が描かれたネームプレートが飾ってあった。

「…お義母様の趣味…？」

新見さんとは少し距離があったが静まり返ったこの場にはよく響いてしまった自分の声を撤回する余地もなく「そうだ」と冷たく言い放ち、すぐさまドアを開け、中に入った。気まずさを回収することできず、新見さんの後を追いかけるように私も門をくぐった。

中も外観の想像通り、欧米風の作りでもしかしたら普段はメイドさんなんかが立って迎えるのでは、なんて妄想が一瞬過る。

「靴はその靴箱にしまって。部屋に案内する」

手早くスリッパを出され、妄想でワントテンポ遅れる脳に気合を入れ直し、あとに続く。

案内された部屋は二階の階段近くの一室で、ドアがダークブラウンの木製でできた雰囲気のある部屋でそれだけで興奮するのがわかった。

「かわいい…」

ドアを開け、中を覗くとそこは、洋画のワンシーンに出てきそうな部屋で、おもわず感嘆すると、廊下に突っ立っていた新見さんが「気に入ったか」と聞いてきた。

「はい！　すごく可愛らしいお部屋ですね。私が使わせてもらっても大丈夫なんですか？」

「ああ。部屋は無駄に余っているからな。俺は向かいの部屋にいる。何かあればノックするように」

「わかりました」

「着替えはクローゼットから適当にきてくれてかまわない」

「…着替えがあるんですか？」

「ああ。母が置いておくと言っていた。明日は7時頃に呼びにくる。それまでに起きておくように」

「わかりました」

これ以上話すことはないのか、私の了承を聞くと新見さんはすぐにドアを閉めてしまいそうな勢いだったので、閉め切られてしまう前に「おやすみなさい」と初めて一日の終わりの挨拶を口にする、ドアが一瞬止まり、閉める手前でこちらに視線をむけ、僅かに目線があった。

「…ああ」

そうこぼすと、ドアはパタンとやる気のない音を出して完全に閉め切られた。

「ああ、か」

こぼれた声は自分でも情けなく、笑おうとしたがうまくいくはずもなかった。

気を取り直し、振り返って部屋を見渡すとそこは異空間のようで、今まで起きた現実なんて忘れられそうなそんな素敵な空間だった。とりあえず手にしていたカバンをベッドの上に置く。そして、カバンの中からさっきの指輪が入ったケースを取り出し、開けて見る。そこには未だに輝きが放たれ、その輝きはあまりにも煌きすぎるので、慌てて蓋をとじメインテーブルの上に置いた。

しばらくの間、そのケースを眺めていたが、この静かな空間と落ちていく感情がまた共鳴しそうになっていることに気づき、慌てて視線を反らす。すると、視線の端にドアを見つけた。興味をそそられるように近寄り、中を覗くとそこは、異常に広く、奥にはなんとバスルームまで完備されていた。

「ここで暮せと…？」

そう言われてもなんの不自由もなさそうに感じるほど整っていた。さすがに、キッチンはなかったがトイレもしっかり置いてあった。

それから部屋を探索し、思う存分堪能すると明日の朝が早いことを思い出し、お風呂に入ることにした。お義母様が用意して下さったという着替えも気になり、クローゼットを開くとそこには何着もの服が収納されており、驚きのあまり、とりあえずドアを閉めてしまった。

「…着替えってパジャマのことじゃない…？」

そんなことを呟いても返答してくれる心優しい人物がいるはずもなく。仕方なくもう一度クローゼットを開け中身を確認する。そこには、ネグリジェと言われるようなものが3着と、それからシンプルなワンピース、シャツ、スカート、ショーツパンツなど日常生活で着るような服が何着も収納されている。ジャンルも様々でキレイ系からカジュアル系まで幅広く、それはまるで、とりあえず集めてみましたと言わんばかりのフリージャンルさだった。

その意図はよくわからないが、ネグリジェをパジャマ代わりにすることなんて到底できなし、かといってこの高級そうなワンピースやらショーツパンツをパジャマ替わりにすることもできず、諦めてクローゼットを閉めた。

そう言えば下着はどうすればいいんだろう？ そんなことを考えながら悶々していると控えめなノック音が響き、慌ててドアの方へ駆け寄った。

「はい」

「私！ 春香さん」

その声はお義母さまだった。

「すぐ開けます！」

ドアを開けると素早く視線が頭の方からつま先へ移り、安堵のため息をこぼされた。

「あ、よかった。まだお風呂入ってないわよね？」

「はい」

「私ったら、下着を届け忘れてて。ごめんなさいね？」

「い、いえ！ そんな、あの」

「遠慮せずに使って？ あ、パジャマはクローゼットの中にあるから使ってね？ 春香さんのために集めたんだから。それに、明日のパーティーに今日と同じ下着はちよつとね？ 明日の着替え、私も立ち会うし」

「立ち会う？！ なんですか？ それ」

混乱のあまりすこし声を荒げてしまったがお義母さまは嫌な顔一つせず、クスッと笑っただけで「明日わかるわよー」と新見さんと同じことを言うので不覚にも親子なんだな、なんて頓珍漢な事を考えていた。

「それじゃ、また明日ね。あんまりいっぱい話すと怒られちゃうから」

誰に？ と問う前に手を振りながらドアを閉められてしまった。

一体なんだったんだ、と溜息をこぼしながら手渡された袋の中身を確認するとひらひらの白のレースがついた生地が少ない下着だった。

「…これは零のパンティーですよ…」

虚しくなりながらも、せつかくの好意を無碍にする勇氣などなく、恥ずかしいネグリジェと下着を持ってお風呂場に向かった。

朝目覚め、時計を見ると5時すぎだった。
少し早く起きすぎたかな、なんて思いながら顔を洗い、歯を磨いたところで重大なミスに気がついた。

「メイク道具！」

昨日は急いでいてメイク道具の入ったポーチを入れ忘れてしまっていた。泊るなんて思ってもみなかったし、なんて言い訳を心の中で並べてみたが、社会人としての身だしなみとして化粧ポーチを持っていないなど言語道断。零がこの場にいれば、小一時間は説教される勢いのミスだ。

どうすればいいか悩む。が、選択肢などなかった。例えば、すっぴんでお義母さまに会い、メイク道具を貸してもらうなんて、失礼にもほどがある。どうすればいいのやら。

そこまで考え、向かいの部屋に新見さんがいることを思い出した。新見さんにすっぴんを晒すのも心苦しいが、既に昨日の朝見せているし、今の状態で贅沢は言ってられない。大きく深呼吸をして気休め程度に心を落ち着かせ、鏡の前で寝癖は付いていないか確認してから、向かいにある部屋へ向かった。

ノックをする前にもう一度深呼吸をし、髪を手櫛で整ってから控えめにドアを叩いた。

「はい」

「す、すみません」

ドアの向こうから聞こえてきた声は今起きたのか、少し掠れた声で、先ほどとは違った緊張が身体を駆け巡りとっさに謝罪の言葉を口にしていた。

少し間を置いてからドアが開かれ、隙間からのぞく瞳が寝起きを物語っていたがそこが余計に色気を誘い、息をすることさえ煩わしく

感じそうな自分がいた。

「…まだ、時間には早いと思うが？」

「す、すみません。問題というか、忘れ物をしてしまっ…」

なるべくこの顔を晒さないように、視線を新見さんの足元に落としながら話すと頭上からあくびの音が微かに聞こえ、どきまぎしてしまふ。

「何を忘れた？」

まだ覚醒していないのか、言葉の節々にいつもとは違う気だるげな声に甘さを含み、朝から心臓が高鳴って仕方がない。なんて恐ろしい人。

「メイクポーチを…。すみません」

そう言うのがやつとの有様に落ち着きを取り戻すべく左手で右手の腕をさすっていた。が、急に視界が意思とはそぐい、あげられた。

「え？」

突然の変化に脳がついていけない。

顎の下に伸びた新見さんの左手であつたりとか見つめている瞳であつたりとかもうなにもかもがわからない。

「…ふーん。メイク道具ってベッドサイドの鏡のところになかった？」

「え？ あの？」

「ちよっとおいで」

そういつて昨日寝たあの可愛い部屋に戻された。

「…あ、これ。これじゃ足りない？」

指された指先を目線で追うと確かにベッドの横にメイク道具が揃えてあった。それも普段使っている化粧品よりも高価なものがずらりと並べられていた。

「た、足够了…。十分…」

「そ。それならいいけど。それから、今度からはその格好でうちよろしないように」

そう言つと足早に部屋を出ていかれ、自分の姿を確認すると恐ろしい現実が待っていた。

22（前書き）

前回：新見さんの実家に泊まりに行くことになったサト。案内された部屋のすごさに驚愕しつつも眠りについたが朝目覚めるメイク道具を忘れていることに気がついた。迷った挙句新見さんの部屋に赴き相談するが、部屋に用意されていることに気がつかなかったのかと指摘されたうえ、ネグリジェ姿のサトに冷たく注意し部屋を後にしていった。

パニックを起すが、悲鳴となってあらわれなかった自分を褒めてあげたい。これ以上冷静さを失ってしまうと何を仕出かすか自分でさえわからない。そう思い、時間もまだ余裕があることもあり、軽くシャワーを浴びて、なけなしの冷静さを総動員させた。

お風呂場からあがり、昨日きていた服を身に纏い、髪を乾かすと時間は6時を少し過ぎた所だった。計算通り進む準備の良さに少しは冷静さを取り戻せたようで安堵のため息がこぼれた。

それからは用意されてあった化粧品を確認すると、化粧水や乳液、ボディクリームも準備されてあった。そろそろお肌の調子も気になっていたので、心の中でお義母さまに謝罪と感謝を述べ、使わせてもらった。それから最後に昨夜もらったばかりの指輪を今度は左薬指に嵌めて準備完了となった。

左薬指に嵌めてみると指輪の輝きとは反し、胸の中が冷たくなっていく感覚が自分でもわかるが、そこにいちいち反応していたらこの部屋から出ていけなくなってしまう。

隙あらば弱さに浸りたがる自分を叱責していると、タイミングを測ったようにドアを叩かれた。

「はい」

「準備はできたか？」

すっかりいつもと同じ声色を放つ新見さんに少し残念に思いながらドアを開けた。

「はい」

「…クローゼットの服は気に入らなかったのか？」

「あ、いえ。服は着て来たものがあつたので借りなくてもいいかと思ひまして…」

「気に入らなかつたわけではないのなら、用意した服に着替えてくれ」

「いいんですか？」

「頼んでいるのはこちらだ」

そう言われて、新見さんの言葉のどこで頼まれた言葉が発せられたのか皆目検討がつかず、「はあ」という言葉にもならない声がこぼれおちると直ぐにドアを閉められた。

私が鈍感、なのかな？

そう思いつつクローゼットを開け、一番シンプルな紺色の丸襟で胸元に花の刺繍がされているワンピースを手に取り、着用した。サイズもぴったりで驚いたが、腕の部分のパフスリーブが可愛くてその驚きはすっかり消え去ってしまった。

「お待たせしました」

ドアを開けてみたが新見さんは居らず、あたりに視線をむけると、そのすぐ横の壁に凭れかかり、腕を組んでいる姿が目に入った。その姿はとても美しく、チノパンと紺色のボタンダウンがよく似合っていた。

「朝食はこちらで準備した。母も同席し、今日の流れについて軽く話があると思う」

「わかりました」

頷き返すとすぐ横の階段を降り、リビングへ案内された。

リビングは玄関をまっすぐ奥に進んだところにあるようだった。リビングは昨夜私を案内した部屋とは比べ物にならないほどの広さがあった。家具もアンティーク調で統一され、どこをみても眩暈が起きてしまいそうなほど輝いていた。

「あら。二人とも紺色の服だなんて。お揃いは指輪だけでいいのよ？ まったく。可愛いことするのね」

先にリビングに来ていたお義母さまが私たちを見るや否や口元を手で覆い、上品に笑いながら言いのけた。

指輪？ お揃い？

「誤解です」

固まっている私を他所に、しっかりとした声で新見さんが否定すると、すかさずお義母さまがニヤリと微笑む。

「あら？ 誠が訂正するなんて余計に怪しいわね」

「あ、あの、お義母さま」

「ふふ、気にしないで。さ、座りましょう」

そのまま六人掛けのテーブルに案内される。が、どこにどうやって座ればいいのかわからない。

テーブルを前に固まっているが、私の様子に気づかないのか、お義母さまは三つ並んだ椅子の真ん中に座り、新見さんはお義母さまと向かい合う辺の端に座ったので、近くにあった椅子の内、新見さんと一つ間隔をあけた右端の椅子を引き、座った。

「春香さんはコーヒーと紅茶どちらがいいかしら？　ちなみに、私のオススメは紅茶よ」

「では、紅茶をお願いします」

「誠は？」

「コーヒー」

「ひねくれ者ー。これだから無愛想はいやよ」

頬を可愛らしく膨らませる姿は女子高生のようで、とてもお義母さまには見えない潤いが漂っており、充実していると年もとらないのか、と考えていた。

「紅茶といっても、フレーバーティーなんだけど、春香さん飲める？」

「あ、はい。大好きです」

「それはよかったわ」

お義母さまがそう言われると、静かに奥から、年配の男性がやってきてこちらに軽くお辞儀をしてからお義母さまの近くで足を止めた。

「昨日のフレーバーティーを二つとコーヒーを。朝食は軽くお願いね」

「畏まりました」

年老いた男性ではあるが、漂うオーラは上品で執事として洗練された仕草が時折心を掴む。

「朝食がくるまで、今日の流れについて話しましょうか。春香さんはどこまで聞いたのかしら」

そう言われ、何と答えていいものかわからず、曖昧に微笑みその場を濁す。そもそも、今日になればわかると言ったのはあなたたちではありませんか。

「えっと、お昼から開催されるんですよね…?」

必死に情報を捻り出すと、お義母さまは少し眉を顰め、新見さんの方へ鋭い視線を投じた。

「貴方、ちゃんと説明しなかったの?」

声色も冷たさと鋭さが混ざり、そこに嫌悪感があることは明らかにだ。

「…どうせ今日わかるだろ」

「なんです? その投げやりな態度は。信じられません」

ぷりぷりと怒る姿はお義母さまとは思えないほど若々しくて可愛らしく、対象的なふたりをただポカンと眺めていた。

「男の人って本当、思いやりが足りないわね。春香さんごめんなさいね? 不安だったでしょう? お昼のパーティーは家族との面会みたいなものだからパーティーというとなんだか意味合いが違うかしら。とにかく、堅苦しくないから、緊張しないで」

表情が引きつっていたのか、お義母さまは私の緊張をほぐすように優しく話しかけてくれる。

「はい」

そう言ってお義母さまに微笑みを向けるとお義母さまも微笑み返してくださった。

22（後書き）

遅くなりました。忘れられているかと思い前回のあらすじをちらつと書いてみましたが邪魔ですかね？それでも読んで下さってありがとうございます。

《コンコン》

控えめなノック音が響き、自然と顔をドアの方へ向ける。少し間を置いてからゆっくりドアが開かれた。

「お食事をお持ちいたしました」

先ほどの男性とその後ろに女の人が二人並び、部屋に入る際上半身を折り入室した。

「失礼します」

「失礼します」

あらわれたら女性は二人とも落ち着いた声で外見は私とそれほど変わらないように見えたが、醸し出す雰囲気の落ち着きや冷静な声音から少し年上かもしれない、と思い直した。

そんな彼女達を観察していると彼女達は私と新見さんの斜め後ろまで近寄り、そこで止まった。

男性はお義母さまの横で歩みを止め、右斜め後ろから朝食の準備を始めた。ワンテンポ遅れてから私の新見さんの後ろの女性達も取り掛かった。

机に並べられた朝食は、新見さんの好みではないはずの洋食だった。

「お昼に食べると思うから朝は軽くさせたのよ。和食派だった？」

お義母さまが私の表情に察し、すかさずフォローをいれられた。

「い、いえ！ 私はどちらでも大丈夫ですので。それにとっても豪華な朝ごはん、申し訳ないです」

「あら、それならいいんだけど」

「それに、この紅茶とても美味しいです。香りが爽やかで気持ち落ち着きます」

「でしょう？ 私のオススメよ。よかつたら帰りに持って帰って」

「いいんですか？ 嬉しいです」

そう言つて紅茶に口を付ける。舌で味わうより先に香りが鼻を攪り口元が緩む。緩んだ口に流し込むとそこからさっぱりとした味が広がる。ローズヒップが入っているのか、赤く透き通った液体が美しく、それにまた瞳が喜ぶ。

「気に入ってもらえてよかったわ。他にもいろんな種類があるからぜひ飲んでみて」

「お義母さまが育てていらつしゃるんですか？」

「ええ。もともと紅茶が好きで、作ってみたくなつちやつたの」

趣味で作っているレベルではない。それくらい美味しくあがつているので、もう一度綺麗は赤色の液体に目線を落とした。

「それより。今日の予定」

新見さんのツンとした声が響く。その声音は、まるで和んでいた空気が気に食わないような音に聞こえ、急いで視線をあげる。

「あ、そうだったわ。紅茶を褒められてつい舞い上がったわ。今から春香さんは衣装合わせよ。誠は何するのよ」

「俺はあいつら迎えに行つてから着替える」

「あ、そうなの？　じゃ、別行動ね。春香さんの衣装はちゃんとシワ伸ばしさせたわよね？」

「ああ。仲村さんに頼んだよ。他の荷物も全部預けてあるから」

テンポ良く繰り広げられていく会話に邪魔だけはしないように心掛け、おとなしくウインナーを口に放り込んだ。

「そう。それならいいわ。春香さん、何着買ってもらったの？」

ニコニコと微笑むお義母さまに、またしても頬がひくついた。

ひくつく頬を隠すように、慌ててウインナーを飲み込んだ。が、味わいが足りない主張したいのか、憎たらしくも喉を通過する際ゴロゴロとした存在感を存分に残してから胃へと移動していった。ウインナーの反撃、とどうでもいいことが頭の中で駆け巡り、慌てて払いのける。

「な、何着……？」

「……誠？　何してるのかしら？　愚図なの？」

お義母さまとはあまりにもかけ離れた辛辣な言葉をにつこり笑顔で言い放つものだからウインナーのことなどすぐさま忘れ去り、現状に目を見開き、固まった。そんな私に反して新見さんは、一切怯むことなく「そんなこと知るわけないだろ」と言い捨てた。お義母さまと向かい合っているにも関わらず。

「あ、あの！　すごく高価な物をたくさん買っていたいで、そのすみません！」

「あら。春香さんてば、欲が無いのね。もっと買わせておけばよかったのに。何着か私のものがあるし、今日は我慢してくれる？」

「着替えるものなんですか？」

恐る恐る聞くとお義母さまは、キョトンとした表情で、着替えないの？ と顔に貼り付けていた。

「飽きるじゃない？」

端のほうから大きなため息が聞こえた。

それから食べながらお義母さまの趣味のガーデニングの話など、何気ない話をいくつかすると、新見さんが席を立った。

「じゃ、俺行くから」

「はい。気をつけて」

まだ朝食を食べていた私とお義母さまその場で新見さんと別れた。

「さてと。着替えとメイクにセット。これからが大変よー」

「め、メイクもですか？」

今朝の出来事を思い出し、サッと顔が赤らんだ。

「恥ずかしいの？」

不思議そうに聞くお義母さまになんでもありませんと言って頭をブンブンと左右に振った。

「それならいいけど。それじゃ、移動しましょうか。着替えは奥の部屋でするから」

「あ、はい。ご馳走様でした」

後ろに控えていた女性がそつとお皿をさげてくれたのでお礼を述べると柔らかい笑みを浮かべ「いえ」と答えてくれた。雰囲気がとても優しい人だ。

お義母さまの後をついていくと、フィッティングルームと言うにはどこか勿体無く、ダンスレッスンに使われる部屋というにはお洒落すぎる、そんな部屋に案内された。

「そこらへんに適当に座って。二着目のドレスを決めましょう」

キラキラと輝くお義母さまの瞳がなんだか可笑しくて、思わず口角があがった。

「はい。ありがとうございます」

しかし、並べられる豪華なドレスたちに気圧され参ってしまうとは思わなかった。

「春香さんは肌が白いからどのドレスも似合いそうね。羨ましいわ」
永遠に続きそうな褒め言葉の連続に照れよりも苦笑が先に出てしまう。

「仲村さんもそう思うでしょ？」

既にこの部屋で待機していた優しそうな女性に向かって話をふると、

仲村さんと呼ばれた女性は控えめに微笑み「はい」と答えた。

「春香様は、肌も美しいですね」

「若さかしら？ 本当に羨ましいわ」

「奥様もお綺麗ではありませんか。私からして見ればお二人とも羨ましいです」

私は苦笑するほかなかった。

膨大なドレスの中から一着を選び出すなんてことができるはずもなく、結局お義母さまと仲村さんの二人が白熱した討論を交えながら選んでくれた。

「お昼はこのカクテルドレスにしましょう。誠が買ったドレスは夜の時に着ましょう」

「何から何まで、本当にありがとうございます」

お義母さまと仲村さんに頭を下げると二人とも微笑んでくださり、一安心した。漸く、強ばっていた頬の引き攣りが少し和らぐ。

「では、そろそろ準備に取り掛かりましょう。仲村さん、あとは頼んだわ。私も別室で準備をしてくるから」

「畏まりました」

仲村さんの返答を聞くとお義母さまはすぐさま立ち上がり、退室された。お義母さまの姿が見えなくなることを確認すると仲村さんはクスと声をもらした。反射的に仲村さんに視線を向けると「ごめんなさい」と漏らした。

「春香さんがあまりにも緊張なさっているので、可愛いな、と思っ」

「緊張、わかりますか？」

そう聞いてみたが、口元が引きつっていることが自分でもわかった。

「ふふ。悪いことではないのよ？ さ、私たちも準備にかかりましよう」

仲村さんは何がおもしろいのかくすくと控えめではあるが口元に笑みを作りながら言った。その笑みになんだか嫌な予感がするがつこむことも憚れ、苦笑を浮かべつつやりすごした。

「それでは、こちらのコルセットとペチコートを着用後、ドレスにお着替えしていただきます」

微笑んだ表情の中に純粹な笑顔とは言い難い不穩な雰囲気を漂わせていたが、反論を受け付けてもらえそうになく、気圧されるように「はい…」と弱々しくもらした。

私の返答を聞き終えると、どこからかメイドさんがそろそろと静かに入室し、かわりに仲村さんは退出された。そろそろと湧き出て来る彼女達は一体どこに隠れていたのだと思うと同時にこんなにメイドさんがいるお家に一瞬でも嫁ぐことになったことに肝が冷えた。いや、瞬間冷凍された気分だった。

「失礼いたします。下着はご自分のものをお召しですか？」

先ほど食事を準備してくれたメイドさんとは違う人物でこちらは気が強そうな雰囲気を漂わせており、お嬢様の高飛車と言われると納得してしまう態度だった。

「い、いえ。お義母さまから…」

「…畏まりました。では、お召し物をお脱ぎください」

一瞬、眉を顰めた仕草に私のことをよく思っていないことは一目瞭

然で、きつと嫌々やっているのだろうなと思うと思わず苦い笑みがもれた。

「自分で着れるので」

少しでも手間を省かせようと声をかけたがすぐに目で制され、無言でワンピースのチャックを降ろされた。

このメイドさんがチャックに手を掛けると周りで見つめていたメイドさん達のやる気スイッチがオンになり、私を囲うと手際良く脱がされ、コルセットを装着される。恥ずかしさを感じる暇も与えない程の手際の良さは目を瞠るもので、プロ根性を垣間見た。

「息を大きく吸い込んだ後、大きく吐き出してください」

…なんてことだ。

ギシギシと軋む骨の音が聞こえないのだろうか。私の肋骨は既に限界値にたどり着いているのに、これ以上締めようとするのですか。抗議したい言葉はすぐそこまで来ていたので吐きだそうと息を洩らすと、すぐにまたギシッと締め付けられ、反論の言葉は体内でぐちゃぐちゃに碎け散った。

「続いてにメイクとヘアセットをするので、奥の化粧台へ移動してください」

「あ、はい」

吐息を吐き出だけでも骨が何かわからないものが贅肉に突き刺さる。よろよるとメイドさん達の後を追ひ、化粧台へ向かう。化粧台はこのフィッティングルーム内に設置されており、三面鏡の縁にはライトストーンや装飾品が豪華に飾られており、誤られることは一切感じなかった。

私を化粧台に座らせると、すぐに顔をいじられたり髪をセットされたり、人形のようにされるがままになっていた。

用意が終わるとメイドさん達はそそくさと退出していったのでその場に取り残された私は、手持ち無沙汰になってしまい、埋めるように手を彷徨わせると携帯の存在を思い出した。どうせ連絡なんてないだろうけど、と心の中で皮肉ってみたが、手に取ってみるとチ力チ力とランプが点灯していた。

『新着メッセージが二件』

DMだろうな、と思いつつも確認してみると一通目は澪からで二通目は会社からだった。澪のメールは駅で別れた後どうなったかというミミハーな内容だったため、はぐらかし脈絡のない内容を返信した。

二通目の会社からの連絡は、篠部君からで件名に緊急な連絡と書かれてあった。そこから何かミスをしたか、ミスを見つけたのだろうと容易に想像することができた。普段の私なら何の迷いもなくすぐに会社へ向かうが、今日はこれから大切なパーティーがある。ここから会社へ向かうにはあまり時間に余裕がなく、出勤できるだろうかと考えているとタイミング良くお義母さまが現れ、申し訳なさそうな表情を向けた。

「どうかしましたか？」

「誠、迎えに行ったでしょ？ その知人が乗るはずだった飛行機がね、暴風のため一時足止めされているらしいの。こちらに着くには一時間は遅くなると思うのよ」

今からさらに一時間あれば、会社へ向かって帰って来ることがななんとかできそうだと判断し、意を決する。

「実は先ほど会社からトラブルが生じたと連絡がありました。一時間で解決できると思いますので、少し席を外してもよろしいですか？」

なんとも礼儀知らずな嫁だと自分でも思う。ここから逃げたいと思っているのだろうか。そこまで考えてほろ苦い思いが浮上する。確かに、逃げれるものなら逃げたいかもしれない。

「あら。それは大変ね。どうせ待ってもらっただけだったのだし。構わないわ」

につこりと微笑んだお義母さまに心の中で何度も謝罪を唱えた。

いちいち着替えていられるはずもなく、家から一步踏み出すと視線を感じた。結婚式に出席する招待客に見えなくもないためか、その視線はあまり冷たいものではなく、それがせめてもの救いだった。が、好奇の目にできることなら晒したくないと思うのが人の性。急いでオフィスに向かった。

オフィスに駆け込む形で入室するとそこには私服に身を包んだ篠部君だけがパソコンの前で座っていた。休日に出勤する勤勉家はいないということなのか、それとも要領のいいやつばかりなのか。

「遅くなって、ごめんなさい」

駅から駆け込んでいたせいか、息が上がり途切れ途切れ答える私に視線を向けた篠部君は目を見開いた。

「どうしたんです？ その服……」

素直に上から下まで視線を動かした篠部君に思わず苦笑しながら「ちよつと、ね」と答えた。それ以上なにを話していいのかわからなかったし、高くて細いヒールで走ったせいで足が情けなくガタガタと悲鳴をあげたので、早々に聞き出したかったこともあった。

「それで、何があつたの？ 計算が合わないの？」

ようやく息も整いだし、篠部君のデスクに近づくと今度は篠部君が

苦笑を浮かべながらパソコンに視線を落とし「ちょっとここが…」と、申し訳なさそうに聞いてくる姿は、理想の後輩像のように思えた。

篠部君が指摘した箇所は何ら難しい問題でもなく、初歩的な記入ミスだった。普段の篠部君なら気づけた問題で、わざわざ呼び出すほどのことでもないように思え、首を傾げる。が、きっとオフィスに一人でいつもと違った環境に軽いパニックを起こし、普段なら気づけるミスにも気づけなかったのかもしれない。私が新人のころにもあったことだったので、篠部君のように仕事ができる新人でも私のようなミスを起こすことがあるのかと思うと不謹慎にも親近感が湧いた。

「すみません。こんな初歩的なミスでわざわざ休日に呼び出してしまった」

「気にしないで。私もよくやるから」

そう言つて微笑むと篠部君は視線を私の指先に落とした。

「…それ」

そう言われ、視線の先である自らの左手に視線を向け、自分の左薬指に指輪がはまっていることに漸く気がついた。自分の間抜けさに苛立ちがわく。せめてオフィスに入る前に気づき、外すべきだった。

アクセサリーの一部としてつけているとは思ってこないだろうか？結婚式に参加するような、そんな豪華なドレスに身を包んでいるのだし、ネックレスも豪華で指輪の豪華さに不自然な雰囲気はないはず。大丈夫かも？

そんな浅はかな問いを己にかけてみたが、だったらわざわざ指輪を指摘しないだろともう一人の自分が冷たくつつこんだ。あー、もうそんなこと、今更考えても仕方が無いというのに考えずには居られなかった。

「えっと。あ！ 時間！ ごめんなさい。私、これから知人の催しに参加しないといけないから…」

苦し紛れであからさまな話題転換に自分でも呆れるがここは先輩権限と「大人にはいろいろあるのだから触れてくれるな」という意味合いを込め、近くに置いていた鞆に手を延ばした。

さすがは期待の新人君。私のあからさまな態度に眉一つ動かさず「お忙しい中、お呼びしてすみませんでした。タクシーを呼びますか？」と何事もなかったように振る舞った。表情には爽やかな人懐っこい笑顔のオプションまで付いていた。

「電車で向かうから大丈夫。慌ただしくてごめんね」

心の中でもう一度謝罪の言葉を唱えてからその場をあとにしようとした瞬間、鞆の中の携帯が震えた。その場で携帯を取り出すと電話だったので慌てて通話ボタンを押す。

「も、もしもし」

『今どこだ』

電話の向こうで不機嫌な声を出す新見さんに早くも心が折れる。

「会社です…。今から帰ります」

『…駅まで迎えに行く』

ため息もとれる息とともに吐きだされると無愛想に電話が切れた。

「里中さん、大丈夫ですか？」

会社のオフィスに篠部君がいるということをしつかり失念していたので、びくつと体が反応してしまったが何もなかったかのように笑顔を張り付けて「大丈夫」と答えた。

「えっと、それじゃ、私は行くから、また何かあったら連絡して」

そう言うとともにオフィスを後にした。後ろで篠部君の心配そうな声音が響いていたが、振り返る余裕もなく駅へ向かった。

駅まで急いで向かう。新見さんのほうが早いなんてあり得ないと思うが、もしこれで新見さんより遅く現れたら今度こそなにを言われるかわからないと自分にプレッシャーをかけ、足早に向かった。実際駅についてみると、ロータリーには休日を楽しむカップルや学生たちしか見当たらず、私の取り越し苦労で終わった。

それから数分経つと昨日乗った車がロータリーに止まったので中を覗くように目を凝らすと運転席に新見さんの姿が見えた。駆け出して近寄って行くと中から新見さんが出てきたので驚き、思わず足を止めてしまった。

車内で待つていられないほどの怒りを買ったのだろうか？

そんな考えが過ると、中々一歩踏み出せず、呆然と突っ立っている。と新見さんがこちらに向かって歩き出し、目の前で止まった。

「君はいつたい何をしているんだ。そんな恰好でうろつくなと今朝言っただけのはずだが？」

今朝とは明らかに違った高圧的な言い草に怯みそうになるが、今朝と今とでは意味が違う。恥じられる服ではない。確かに、駅まで走って来たため、髪型は少し崩れているだろうし、顔には少し汗が滲んでいたのせいかく施してくれたメイクが崩れているかもしれないが、そこまで言われることはないだろう、と思わずにはいられない。

何か言い返さなければ、と頭の中でグルグルと考えていると、当たり前だが新見さんは待ってくれるはずもなく、嫌味ったらしくため息を吐き出して背を向けて歩き出した。

「…すみません。急な呼び出しに着替える暇がなかったものですか」

言い訳がましい台詞を彼の背に向かって投げかけると、ピタリとその場で止まり、振り返った。

「…呼び出された？」

「はい。会社でミスがあったようなので」

「誰に？」

「後輩の篠部です。ですが、問題は解決したので、大丈夫だと思われます。一応、明日また見に行つて来ますが、心配されることはないと思います」

何時の間にか仕事モードに入り、口調も変わり今のドレスの姿にはあまりに不釣り合いだった。

新見さんは何か言おうとしたのか、口を開けたが、そこから音となつて吐き出されることはなく、ため息とも呼吸ともとれる息を吐き捨てただけだった。

「いいから乗りなさい」

運転席側に向かつて歩き出す新見さんの背中に縋り付きたくなる気持を抑え、助手席のドアを開けた。

静まり返った車内で何かを発するということはなんだかいけないことのように思えたが、この空気に押しつぶされるくらいなら何か話したほうがマシだと決意を固め、話題を探す。

「あ、あの。知人の方とは無事に会えたのですか？」

「ああ。先に家で準備しているはずだ」

「暴風の影響で遅延していたと聞いたのですが」

お義母さまの話では一時間は帰ってこれないという話だったはずだが、まだあれからそれほど経ってはいなかった。

「運良く早くの便に乗れたみたいだ。このままいけば開催時間にも間に合うだろう」

「そう、ですか。抜け出してすみませんでした」

ようやく自分の行動を詫びることができるような雰囲気、すかさず謝罪を口にしたが新見さんはそれ以上なにも言ってはくれなかった。

家に戻るとすぐに執事さんとメイドさんが「おかえりなさいませ」と声を揃えた。その姿を目にすると、すぐ頬の筋肉が凝固し、変な角度で口角が歪む。

「奥様でしたらリビングにいらっしゃいます。春香様は今一度フィッティングルームに足を運んでいただけますか？」

「わかりました」

引きつる頬でなんとか答えると、脇に立っていたメイドさんがスリッパを差し出してくれ「こちらです」と案内してくれた。

先ほどのフィッティングルームに案内されると、メイクと髪をセツトしてくれたメイドさんたちがスタンバイしており、お義母さまの手際の良さに失笑していると気の強そうな高飛車メイドさんが頭のとっぺんから足の爪先までゆっくり視線を落とし、不満顔を見せた。

「失礼ですが、今後はこのように髪を振り乱した歩き方はなさらないでください」

言い放った一言に沈んでいた気持ちがさらに下降したが、何も言い返すことができない。

「し、シノさん！ いいすぎですよ」

すっかり落ち込み何も言い返さない私の対応を見ていた周りのメイドさん達があたふたとする中、一人のメイドさんが声をあげた。その声にはまだ幼さが残っているような少し高めの声だった。

「恥をかくのは、誠さんなのよ？」

シノさんと呼ばれたメイドさんは、信じられない、と続きそうな表情で言い放った。その当たり前でしょ、という雰囲気はわかっていたことだが、こうもあからさまに言われると更に落ち込んでしまう。

「だからといって、春香さんが悪いわけではないのにそんな言い方失礼です。シノさんだって廊下を走り抜ける日だってあるじゃない」

相手のメイドさんの口調が崩れかけてきたところをみるとこの二人は同世代なのかもしれない。気の強そうなメイドさんの方が少し大人びてみえたが、考えてみると止めに入ってくれたメイドさんがただの童顔というだけかもしれない。

そんなどうでもいい事で意識をそらしているうちに二人の熱はヒートアップしていた。

「アキメさんに言われたくないわ！」

「私だってシノさんに言われたくないわ！ 何が、振り乱した歩き方、よ。イヤミったらしい」

どうやら気の強そうなメイドさんのシノさんと幼さの残るメイドさんのアキメさんは仲があまりよろしくないようだ。

「あ、あの…」

すっかり声をかけるタイミングを逃していたが、二人の息が一旦止まり、睨み合っている隙に声を絞り出す。その声は案の定、情けない声だったが、そんなことにかまってられる時間はない。

「私はもう出ても大丈夫でしょうか…？」

「す、すみません！ 春香さんがいらつしやいながらこのような失態を晒してしまい、申し訳ございません」

アキメさんはすぐに私と向かい合い小さな頭をガクツと勢いよく垂らした。

「あら。まだいらしたんですか？」

「シノさん！ 失礼ですよ！」

二人のやりとりについて苦笑を浮かべると、周りのメイドさん方も同じような表情を浮かべていたので、これは日常茶飯事なのかもしれない。

「アキメさんとシノさんはメイドさんとして長く務められているんですか？」

「はい。この中では一番長いです。シノさんと私は同期ですので、同等ですけど」

その声音はあきらきに不満を含んでおり、私は苦笑を浮かべて流すしか思い当たらなかった。

「えっと、みなさん。余計な手間をかけさせてしまつてすみません。ありがとうございます」

優雅とはいいがたいが、自分の持てる限りの精一杯のお辞儀をし、顔をあげる。アキメさんがにやかな笑顔を浮かべ「とんでもございません。リビングまでご案内いたします」と少し弾んだ声で言い放った。

リビングの前まで案内されるとアキメさんは「私はここで失礼します」と頭を下げたのでお礼を言ってからリビングに入る。中にはお義母さまだけが椅子に座っており、他には誰も見当たらない。

「あ、春香さん。これで揃ったわね。庭に行きましょう。楽しいパーティーの始まりよ」

弾む声は何故か胸に突き刺さる。お義母さまが楽しみにしているこの催しを心の中では、なぜか、暴風で吹き飛ばしてくれたら、と囁いていた。

「はい。宜しく願います」

反射的に貼り付けた笑顔が引きつっていないかが気がかりだったが、お義母さまはパーティーに心が奪われている様子で、私の変化には気づかない。

さっと立ち上がり部屋を出て行くお義母さまの背中中はピンと一筋貫き、シックな黒のドレスに羽織ったストールが美しく、豪華なドレスに負けていない。この後ろについて歩く事が恥ずかしい、と心の底から思った。

「どうしたの？ 春香さん、行きましょ？」

「すみません。すぐ行きます」

お義母さまの趣味である庭へと足を運ぶと、昨夜見た庭とは異なつた雰囲気が漂い、こんな表情もできるのか、と関心する。

風が訪れる度に舞う花弁と甘い香りが鼻腔を燦る。その匂いは、気を緩めているとむせかえってしまいそうなほど甘美で微睡んだ姿へと変貌する。

「春香さん、紹介するわ。私の家族よ」

ぼーっと眺めている私に構わず、テキパキと紹介しはじめたため間抜けなままの表情で視線を向けることになった。そこには見たことのない人が何人が佇んでいた。

「はじめまして。私は、セイ兄の妹の梨です」

につこり微笑むと私の傍まで近寄った。その美しすぎる笑顔が少し恐ろしく感じ、本能のまま後ずさりしてしまいたい。

「仲良くしてください!」

思わぬセリフの後にさっと差し出された白い腕を眺めながら、これは歓迎されているのだろうか、という疑問が頭に過る。

「ええ。宜しく願います」

自信のない声でなんとか答え、弱々しく握り返した。ちらりと新見さんの方を伺うと険しい顔でこちらをじっと見ていたので、何かおかしい対応をとってしまったのかもしれない。

新見さんの隣に立っていた男性もクスクスと、控えめではあるが笑っている。私をバカにしたようなその笑みに申し訳なさとしを感ずるが、申し訳ない感情が勝つてしまい情けなくも眉を下げる。

「栞だけずるいつて。三男の仁です」

相変わらず笑みを浮かべていた男が一步踏み出し、腕を伸ばしてきたので反射的に握り返し「春香です」と応えた。仁と名乗った男は、繋いだ手を一度だけぎゅっと握り返すと手を解放してくれた。安堵のため息をつく間もなく、隣に立つ穏やかそうで紳士な男が続けてにっこりと微笑み口を開ける。

「長男のタケルです。字は尊敬の尊です。本日は遠いところからわざわざありがとうございます」

「ほ、本日はお招きいただき、」

「春香さん。そんな堅苦しい挨拶はいいよ。タケ兄もそんな話しかなくていいから。それより、誠兄ちゃんとどうやって出会ったの？」

「私も知りたいです！ あんな無愛想で無神経な男のどこがよかったです？」

仁と栞は興奮しているのか、ずいっと身を寄せ迫ってきたので、失礼ながらも一步下がってしまった。

「い、いえ。そんな、私のようなものが嫁いでしまつて、」

「いやいやいや。それは謙遜を通り越して嫌味になるから」

「嫌味、ですか？」

自分の顔がさつと青ざめるのが自分でも判つた。声も震え、私の態度はいつも厭味つたらしい態度をとっていたのかと今までの対応が走馬灯のように頭によぎる。

「おい。仁も栞も煩い。まだ挨拶の途中だろ。君も早くこちらに来なさい」

「あ、はい」

新見さんは一步離れた所から私の態度を静かに見ていたようで、離れた所から声をかけられた。どんな所からでも新見さんの声を聞くだけで私は我に返り、反射的に声を出す。それと同時に先ほどまでの考えを振り払う。考えたところでわからないのだし。

「仁、聞いた？ キミ、だつて。名前さえ呼べてないじゃん」

「それに、来なさいだつて」

「偉そうに」

栞さんと仁さんは二人で秘密の会議をするかのように身を寄せ合い耳打ちをするが、音量はわざとらしく大きい。仲は良いみたいだが、そのあからさまな態度を取ると新見さんは怒ってしまうだろうな、

と思っているとすぐに一步離れていた距離から「お前たち黙れないのか」と冷ややかな言葉が矢となり飛び出した。

「おー、怖」

震える仕草をする仁さんを横目に私は新見さんのところまで駆けやる。新見さんは私が到達すると無言で奥へと進みはじめたので遅れないように後をついていく。

「春香さん、ごめんなさいね？　ちょっと煩くて」

「いえ。賑やかでいいですね」

いつのまにかお義母さまも後ろからついてきており、申し訳なさそうに眉尻を垂らし、頬に手をあてていた。

「奥様」

控えめではあるが、耳元で甘く囁くような存在感のあるこの声はあの執事さんだ、とすぐにわかり、お義母さまの後ろに控えているであろうおじさまを目で探す。

「あら、どうしたの？」

「少しご相談したいことがございます。今お時間よろしいですか？」

「まだ始まったばかりだというのに？　困ったわね。春香さんともまだ話せてないわ」

そこで視線を私に向けた。その仕草はあからさまで、たじろぎどうしたものか、と心臓が速まる中さつとスマートに現れた新見さんが「あとはやつとくから」と助け舟を差し出してくれた。

「いやよ。誠にまかせるくらいなら栞や仁にやらせたほうが数倍ましだわ」

「いいから、行けよ。羽並が困ってるだろ」

お義母さまの明らかな抗議も耳をかさず、冷たく言い放つとお義母さまも観念したのか、隣に立つ執事さんに「わかったわ。どちらに？」と向かい合っていた。

「あの」

お義母さまが執事さんと一緒に場を離れてから特にこれといったことをやらせることもなく、ただぼんやりとお義母さまご自慢の花たちを眺めていた。

こうして二人で並んで花を鑑賞するといったデートの様なことをしたことがないので、少しどぎまぎしてしまうが、こんな緊張が新見さんに伝わってしまえば、意味がないので必死に話題を探す。狂った頭が何をトチ狂ったのか、話題を探す合間空いた手で目の前の綺麗に咲き誇る花を手折ってしまいたいという衝動が浮上する。慌てて両手を強く握る。この手を新見さんが握ってくれたらどんなに幸せだろうか、なんて乙女なことを考えながら。

「なんだ」

「きょうだいが、いらっしやっただすね」

静まり返る空気に話題のチョイスをしくじったことを肌で感じたが、もう後戻りは出来ない。

「し、栞さんとはいくつ離れているんですか？」

ひくつく頬を無理やりあげ、笑顔を作る。が、新見さんの視線はいまだに花を捕え、一向にこちらを見てはくれない。代わりに、新見さんの背後に佇む仁さんと栞さんが何かもの言いたげな表情でこちらを見つめているのが視界にはいる。

栞さんと仁さんの視線を感じ、私はどういった態度を取ることが一番ふさわしいのかわからず、視線を彷徨わせる。

そわそわした態度をとってはいけない、と頭では理解できてもこの言いようのないプレッシャーが、脳から体へ伝達するはずの指令を邪魔する。

そんな私の変化に珍しく気づく様子のない新見さんは視線をまだ花へ向けていたままだった。

「栞は君の三歳年下だ」

鼻腔に甘ったるい花の香りが押し寄せる。なんの花だろう、と考える暇もなく私は混乱と喜びで気がおかしくなりそうだった。

私の三歳年下？

私の？

それはつまり、私の年齢を把握している、ということだろうか。

こんなことでいい年した女が喜べると誰が知っているのだろうか。きつと、世の男性は知らない。女はこんなにも簡単に舞い上がることを。そして墮としていくのも男性だということ。

「に、二十三ですが？」

確認のように聞き出す私の浅ましい気持ちなど、一切わからないように「ああ、多分な」と無愛想に答えた。

この甘ったるい花の香りも、漂う花弁も何もかもが急に美しく輝い

て見えた。

「で、では、仁さんは」

「仁は君と同じ年のはずだ」

「み、見えませんね。尊さんはおいつくなのですか」

「兄は34だ。そんなことより。君は本当に何がしたいんだ」

合わない視線。

それはまるで、絡まることなど初めからなかったような態度で、たんとと語られる。

何がしたい？

「そ、れは。ど、どう、意味で」

何者かにぎゅっと心臓を握られる。痛みを感じるが、それはどこから痛みが発生しているのかわからない。

背骨の奥の細胞？ 筋肉？ 肋骨？ 胸？ 目頭？

痛みのあまり言葉を紡ぐことができず、逃げるように視線を足元へ落とす。視界の端に映る自分の手と足が震えているのが見えた。

何がしたいかなんて、どうして今更。

「もう、いい」

冷たく遮断するかのような言い方に、私はまた何かしてしまったのかとお身体中に走る痛みが深くなる。傷口が見えないことが唯一の救いだ。

「挨拶が残っている。ついてきなさい」

私に一度も視線を向けることなく歩き出す新見さんを見て、どうして先程あんなにも喜んだのか。自分の能天気さに嫌気がさす。

私はこの人がどうしようもなく好きだ。好きです。愛してるって言いたい。

その広い背中に腕を回して愛を囁くと、甘い声で囁き返してくれる。

そんな夢を抱いていた。なんて、馬鹿馬鹿しいの。そんなこと夢にだって出てきやしないのに、ましてや現実で起こるはずがない。それなのに、一丁前に傷つく自分に虫唾が走る。

彼が初めから私に興味がないことくらいわかっていたはずなのに。昨日からの非日常に私は酔っていたのだ。

下唇を強く噛む。

この痛みが現実だ、ということを手から理解させてからゆっくり元に戻した。そこでようやくくせっかくメイドさん達が綺麗にグロスを塗ってくれたことを思い出し、申し訳なく心の中でそっと謝った。

「遅れてすまない」

長身で爽やかな男性がスーツを着こなし、颯爽と現れた。新見さんの前に立っている男性は本来ならば60歳前後のお年だと言うのに年齢を一切感じさせない、不思議な方。初対面の時から不思議で仕方なかった人だ。

「春香さん。こんにちは」

微笑まれると思わず赤面してしまうような紳士にぎこちなく微笑み返す。

「こ、こんにちは。お義父さま」

「誠、ちよつと邪魔だろ。春香さんが見えない」

「父さんが遅れてくるからまだ乾杯もできていないんだ。挨拶は後にしてくれ」

「そうよ、あなた。あなたがなかなか来ないからあたしまで春香さんと話せなかったのよ？ 早く乾杯しちゃいましょう」

いつのまにか戻ってきたお義母さまと執事さんがお義父さまに駆け寄って勢いよく話した。

それを拍子に散らばっていた人々が庭の真ん中に置かれている白いテーブル付近へ自然と流れていく。それに合わせて、私たちもテーブルへ向かう。メイドさんや執事さんが手際良くテーブルの上へ様々なご飯が並べられていく。手元には、乾杯用のシャンパンが渡され、いきたわるとお義父さまがゴホン、とわざとらしく咳を一つ零した。

「えー、遅れて済まない。忙しい中集まってくれた君たちには深く感謝する。…身内だけの集まりだ。堅苦しい挨拶はここまでとして、今日はゆっくりくつろいでくれ。ここではしゃぎすぎて夜のパーティーに支障が出ないようにな。それでは、乾杯」

クスクスと笑い声が漏れる。その合間を縫うようにしてグラスとグラスが触れる高音が小気味良く響いた。

「春香さん、乾杯」

いつの間にか隣を陣取っていた栞さんに半ば無理やりグラスを傾けられ慌ててグラスを持っていった。

「か、乾杯」

栞さんは微笑むと透明に近い綺麗な気泡を含むその液体を美味しそうに飲み込んだ。礼儀として私も一口口に運ぶと口内で気泡がはじける。美味しい。

アルコールと気泡のはじける感覚が気持ちよく、口元を緩めていると、栞さんが一歩こちらに近づく。体がふれあいそうなほど近寄った距離感に戸惑っていると、栞さんの唇が耳元へ近寄った。

「春香さんってセイ兄の傍を離れると怒られるの？」

囁かれる言葉に、身体が一瞬で固まる。

怒られる？ それはどういう意味だろう。

「春香さん、大丈夫？」

心配そうに覗き込むこの女の子は、私のことをどう思っているのだろう。そんなどうでもいいことが頭によぎる。

「え、ええ。ごめんなさい。えっと、怒られるとは？」

「だって、セイ兄ったらずっと怖い顔して春香さんのこと見てるから見張ってるのかと思って」

「離れるな、とは言われてないので、怒られることはないと思うん

ですが」

それは離れる離れないの見張りなんかではなく、私の粗相の数々が目に余っているだけだと思う、とはさすがに言えず、苦笑を浮かべた。

「そう？ それなら、少しあちらで話さない？」

につこり微笑み、指さす方向の先にはまた別の白いテーブルが構えており、その上にもしっかりと料理が並んであった。辺りを見渡すとそういったテーブルがあちこちに設置され、様々な料理が並べられていることが遠目でもわかった。

「ご飯でも食べながら」

「あ、はい」

こくりと頷くと栞さんは満足そうに二度うなずき返し、テーブルへ向かおうとしたのでそれについて行く前に隣で背筋を伸ばして立っている新見さんに一言詫びておこうと向き合った。

「あちらのご飯を頂いてきます」

「俺も行こう」

既に空になっていたグラスを右手に持ちながら、淡々と言われる。

「わかりました」という前に栞さんが「ちょっと！」と少し声を張る音量で抗議し始めた。

「セイ兄が来るなら意味ないじゃない。黙って待つてられないわけ？」

「煩いな。飯があるんだから仕方ないだろ」

本当はついてなど行きたくない、と顔に大きく張つてあるので苦笑しながら「でしたら何か取ってきます」と提案した。

「君に俺の好みがわかるのか」

その冷たく刺す言葉に傷つけられてはいけない。そう頭で理解していてもこの心臓の痛みは消えないし、表情を取り繕えるほど強くもない。本音を言えばこのまま泣き出して、無様に縋りつきないのに、それを抑えることで必死だった。

「セイ兄好みなんか言わないくせに」

私をかばうような言い草に、少し救われた。

「だから行くと言っただんだ」

文句は一切受けつかないという態度にも関わらず栞さんはぶつぶつと文句を言っていたが、新見さんが歩き始めたので諦めるように大きな溜息を吐き捨て「春香さん、行こうか」と言った。

テーブルを囲うと、サンドイッチやフルーツなど軽食が並べられていた。

テーブルの向い側には仁さんと尊さんもおり、談笑しながらサンドイッチを頬張っていた。その隣には、見たことのない美しい女性たちが妖艶に微笑み、楽しそうに過ごしている。

「あの」

右隣に立つ栞さんの耳元に近寄り、小さく尋ねる。

「尊さんの隣にいる女性方はどなたですか？」

「ああ。あの人たちは尊兄さんと仁の婚約者。まあ、結婚はしないだろうけど」

さらりと言い放った言葉はあまりにも重い一言であるのにそう感じさせないのは栞さんの話術が為す技なのだろうか。

「婚約って結婚を前提にしたお付き合いですよね……？」

「一般的にはそうなんだろうけど、あの二人は非常識というか、親が悪いというか」

そう言いながら、フルーツを一口頬張り「あ、これ甘くておいしい。春香さんも食べる？」と勧めてきた。

「あ、はい。頂きます」

「どうぞ。あの二人は勝手に婚約者だって言い張ってるだけなの。尊兄さんとか最初はちゃんと否定していたんだけどもう面倒になっ

たみたいで言いたいように言わせてるんだって。これって結婚詐欺で捕まる？」

肩をすかしわざとおどける様にして言う姿は好感が持て、少し微笑む。

「お義父さまはなんて仰っているの？」

「さあ。好きなようにしたら、とは思ってると思うよ。うちは放任だから。そんなことより、春香さんだよ。なんでセイ兄なんて男に決めたの？　それが一番の謎だよ」

一番の謎は、あの妖艶な美女と尊さん、仁さんの心境だろうに、とつつこめるわけもなく、愛想笑いで受け流した。

「セイ兄とはどこで知り合ったの？」

砕けた口調が不快に感じない上に、なぜか品の良さも損なわれていない栞を不思議に感じる。

「職場です。一緒の会社に勤めているので」

「そうなの？　春香さんって頭いいのね」

「いえ、たまたま入社できただけで、頭は良くないです」

「ふーん。ねえ、どうして結婚式挙げなかったの？」

神に誓うから。

そう答えられればどれほど楽なんだろう。それでも、その楽さに甘えてはいけない、と内なる自分が囁く。

「忙しい時期でもありましたから挙式は落ち着いてから、ということになったんです」

こつもペラペラと嘘が吐き出せる自分が恐ろしい。それでもあまり罪悪感を感じなかった。それは、この嘘がばれてしまうと新見さんとの結婚がなかったことにされるといふ恐怖心が優つてことだろうか。…だとしたら、恐ろしく醜い。自嘲気味に笑みを浮かべそうになり慌てて気を引き締める。

「落ち着いてからするんだ？ それならいいの。挙式は挙げないとか言い出したら私がセイ兄に一言言おうと思つてただけだから」

「あの、もしかして。栞さんは、この結婚に賛成、してくださっているんですか？」

「私だけでなく、家族皆が泣いて喜んだよ？ なんとってあのセイ兄だからね。結婚は一生無理だと思つてたし」

栞さんは、フルーツを食べ終わると、今度はサンドウィッチに手を伸ばす。白く柔らかそうなパンに挟まれているクリーム色の卵が綺麗だ。

「そ、それは、謙遜ですよね？」

「…恋は盲目つてよくできた諺だよね」

大げさにため息をこぼす栞さんの姿にまさか、と言つて笑い飛ばしたが、栞さんは首を左右に振つた。

噎せ返るような花の香りと、目の前の妖艶な美女から香る香水がまわりついた。

「おい」

食事をしにきたはずなのに、新見さんは何も取らずに左隣の男性と

話し込んでいたのだが、急に声をかけられ思わず肩が揺れた。

「は、はい」

私の反応があまりに無様だったのか、栞さんはもちろん、新見さんの隣に立つ男性からも笑われてしまった。

「なんだよ、お前。嫁に怖がられてんの？」

「そうなんですよ。セイ兄ったら、せっかく捕まえた上玉に怯えて虚勢を」

「栞。そのままふざけて口を開けたらその口にゴキブリを放り込むぞ」

なんとも恐ろしい脅しに私はまた震える。

「これだから野蛮人は」

「君も馬鹿みたいにいちいち反応するな」

「すみません」

「へえ、大人しい人なんだ？　今までとは毛色の違う女なんだ」

花の香りと共に漂うように放たれた言葉が私の胸と鎖骨に刺さる。

それは、どういう意味だろう、と問う間もなく新見さんの声が響いた。

「従兄弟の正臣。俺と同年だ」

「はじめまして。大賀　正臣って言います。誠の母親の妹が俺の母さんなんだ。よろしく」

人の良い笑顔が私には少し恐ろしく思えた。
きつと、この人は私を憎んでいる。

そう、直感した。

「はじめまして。春香です」

震えてしまうのではないかと内心ではヒヤヒヤしていたが、思いの外しっかりした声が響く。

なんだ。私はまだイケるんだ。

「よろしくね。俺、夜のパーティーにも参加するからー」

ニヤニヤとだらしなく口角を歪める相手に心の中で汚い感情が蠢く。何も答えることもないだろうと笑顔で受け流すと従兄弟の男性は軽く肩を竦めた。

「あ、誠。さつき美穂みかけたけど、今どこにいの？」

既に興味の対象から外れた私はこっそりと息を吐き出し、気持ちを落ち着かせた。

他人からの遠慮のない非難の視線は、はっきりいつて不愉快だし、傷だつてつく。そんな無言の圧力をかけていただかなくともそんなこと自分が一番わかってるのに。

そこまで開き直ることができることに、新たな発見を見出した気がした。

いつだって私を奈落の底へ突き落とすのは、他人ではなく、この隣の男なのだ。

「そんなこと俺が知るわけないだろ」

「じゃあ、探すの手伝って」

「俺がそんなことすると思うのか？」

「しないと思うからこうやって頭を下げてるんだろ？」

「頭なんて下げてないだろうが。視線は変わらずあっている」
「頼むよ。春香さん、誠連れて行くと淋しくて死んじゃう？」

小馬鹿にする言い方をあえてしているのかと純粹に聞きたかったが、飲み込み首を振った。

「ほら、嫁はいいって言ってるだろ。ちょっと付き合えよ」

新見さんが答える前に、大賀さんは腕をとり引つ張りながら場を離れて行った。

「嵐が去ったわ」

ポツリと囁く栞さんの言葉に同意するように頷いた。

「栞さんも、挨拶があるんじゃないですか？」

「嫌なことを思い出させるのね」

頂垂れながらも手にしていたシャンパングラスとお皿をテーブルに置くと「嫌なことは早いうちから手を打ってくるわ」と宣言したのち、場を離れた。

両サイドがガラリと空くと、周りからの視線が直に届き、居心地は悪いが私はこの場以外どこへいっていいのかもわからないので、その場に立ち尽くしていた。

背後から声をかけられたのはそのすぐ後だった。

「誠の新妻って貴女？」

反射的に振り返るとそこには真つ赤なドレスを身に纏ったスレンダーな美女が艶めかしく笑みを浮かべて立っていた。その表情は、先ほど紹介された男と似たいやらしさが含まれているような気がして、またか、と肩を落とす。

「はい、そうです」

貴女は、と促すが眼前の美しい女性はひらりと交わし、ペースよく話を続けた。

「どうやって貴女のように殿方をゲットできるのかしら？」

貴女みたいな女に、といういやみたらしい意味が含まれていることくらい私にだってわかる。

そんなことに少しでも傷ついた己に嘲笑したい気分だができずにだらしなく、弱々しい笑顔で受け取ってしまった。

「ゲットだなんて、そんな。私が聞きたいくらいです」

「それは結婚していない私への嫌味かしら？」

妖艶な笑みを浮かべる彼女に、それは被害妄想ですよ、と教えてあげたいのに、そんなこと言ってしまったらそれこそ嫌味だ。弱気な気持ちを体現するように、視線が下へと下がり、気を引き締め直し、視線を合わせる。

「まさか」

「貴女は今、私のことを被害妄想、と思ったのでしょうか、その言葉、そっくりそのまま返すわ」

微笑む姿は美しいのに、なぜこつちも攻撃的なのだろう。気に食わないのならほって置いてくれたらいいのに。

「どつという意味ですか？」

「そのままよ。貴女、結婚生活で一体何を主張したの？　いいえ、何か言えたことがあつて？」

何もない。

私は一切、新見さんへ主張したことなどない。

「主張しないことが美德だなんて、そんな時代もう終わったのよ」

勝ち誇るかのような微笑に苛立ちよりも痛みが走った。

そんなこと、言われなくても知ってる。

そう声高に宣言してしまえたら楽なのだろうけど、私の何かがそうはさせてくれない。それが醜いプライド、というやつなのかもしれないし、ただの弱虫精神なのかもしれない。それでも、何か自分からアクションを起こすことはできなかった。

好きだ、なんてとても言えない。胸が痛い。鳩尾の奥にあるわけのわからない臓器が軋むように痛い。顎と耳の付け根の部分が細い針で貫かれたような痛みも走る。目頭だって既に熱い。痛みからなのか、それとも感情からなのかわからないが、今にも涙が溢れてしまふそう。

どうしてこんなことをこんな美女に言われたいといけないのだろう、とか自分に甘い台詞や黒い感情が次々と溢れ、感情のコントロールがうまくいかない。

どうなっているの？

「ふふ、今にも泣き出しそうな顔がそそるわね」

ぐちゃぐちゃの思考の海にダイブしていた私を掬い上げたのは皮肉にも目の前の美女だった。

「ごめんなさい？ ついついイジメすぎてしまったわ。私、貴女のような女の子好きよ？ 今にも泣き出しそうな顔がとても似合う悲劇のヒロインが」

先程までのねつちよりした声音とは異なり、イヤミが含まれていないように感じた。

「本当よ？ そのキョトン顔もとても可愛らしい。思わず食べちゃいたいと願ってしまうほどに」

「そ、それは、」

声を発する度に、喉が熱く言葉が焼けちぎれ、聞き取りにくい。

「嫌味じゃないのよ？ あたし、大賀 美穂って言って、誠の従兄弟なの。ちなみに、正臣とは双子よ」

につこりと笑う顔は確かに面影があるような気がした。

「誠なんて、えらく面倒な男に引っかけってしまった哀れな女の子

に会いにきてみれば、こんな可愛らしいヒロインなんだもの。いじめたくもなるわ。それに、奈那子がかawaiiこちゃんだって珍しく興奮してたから余計いじめてしまったわ」

「ななこさん？」

聞き慣れない女性の名前に、一体、新見さんの周りには美女があと何人出てくるんだと嘆かずには居られない。

「前田 奈那子。ジュエリーショップで会ったでしょ？」

返ったきた答えに、昨日出会ったあの女性を思い出し、目を見開く。

「お知り合いだったんですか？」

「ええ。私たち、大学が同じなの。そんなことより。ねえ、本当にどうして何も言わないの？」

砕けた口調に、少しだけ安堵するが、やはりこの話題は辛い。辛い、と一言で表してしまうと味気ないけれど、他にはつきりとした言葉では言い表せない感情で、強いて言えば、辛い、となる。

「美德だなんてそんな大層な信念は持ち合わせておりませんが」
「何なら持つてるの？」

「…何も。何も持っていないんです。誓いを立てられる環境も、分かち合う時間も、貫き通す意思も、主張する根性も」

「なさそうね」

「実際、ないんです。だから」

「なんか、暗いわ。貴女お酒は？ 飲めないの？」

「飲めますけど」

「ちよつと飲みなさい。なんだか辛気臭くて聞いているとこのドレスが萎れて枯れてしまいそうだわ」

言っ通りだと思った。

31（前書き）

大変お待たせしました。

妖艶な美女はその後すぐにボーイさんらしき人を呼び止め、赤ワインを二つ、と頼んでいた。

その姿をぼんやりと映しながら、赤いドレスには赤でも白でもとにかくワインが似合うだろうな、とどうでもいいことに意識を囚われていた。

引き止めたボーイは優秀だったのか、それともここには優秀なボーイしか雇われていないのか、すぐにグラスに注がれた赤ワインが届き、一つをこちらに渡された。

それを受け取った美女は流れるように、自然な動作で二つの内の一つを私に手渡した後、受け取るとすぐにカチンとグラスを触れ合う小気味良い音が響いた。それを合図に吸い込まれるように赤い液体を胃の中へ流し込んだ。

「美味しい」

つぶやきとも取れる感嘆に美女は満足そうに頷いた。

「これ、私が持参したの。次は白もあるわ」

「あ、あの、あまり飲みすぎると」

「大丈夫よ。酔っ払ってもちゃんと介抱してあげるから。特別よ？」

ふんわりと微笑み、グラスを傾け、赤く染まった液体が消えていく。その動作はこの場に相応しく、優雅だった。こんなにも高級そうで美味しい飲み物でさえ、美女を引き立てる小道具へと成り下がるのか、と嘆きたくもなる。

「前田さんは居らしてないんですか？」

「奈那子は夜からの参加なの。それまで働くそうよ。キャリアウーマンも考えものね」

そう言うときまたグラスを傾け、美女の体内へと流し込まれていく。アルコールなど入っていないかのように、すると飲まれていく赤ワインが底をついてしまいそうな量に差し掛かるとすかさず、ボーイが近寄ってきた。

「次は白を二つ、お願い」

私のグラスにはまだ一口分しか減っていないというのに、なんの疑問もなく、私の分まで一気に注文してしまったので、慌てて、グラスを傾ける。

「ゆっくりでいいのよ？ 私にペースまで合わせてしまつと貴女、廃人になるわよ？」

だったら私の分までワインを頼むというプレッシャーはやめて頂きたい、と心の底から願うが声には出さなかった。

目の前に立つボーイさんは頼まれればすぐにその場から立ち去るように定められているのか、私のグラスの中身に一瞥はしたもののすぐに「畏まりました。すぐにお二つお持ちします」と言い、立ち去ってしまった。

「それにしても、すごい庭園よね。いつみても感服するわ」

そう言い終えると花の方へ歩み出したので私も後を追った。

「貴女はお花とか活けるの？」

視線を少しだけこちらに向けてからまたすぐに美しい花たちへそそがれる。

「いえ」

そんな令嬢みたいなことを求められているのか。

「私も無理。観賞してる分には好きだけど、育てるとか活けるとか
つてする気が知れないわ」

根底から否定する勢いのセリフに、もしかしたら酔っているのでは、
という考えが頭によぎる。ワインは控えたほうがいいかもしれない
と言おうと決心したが、タイミング悪くボーイが現れ、白ワインの
入ったグラスを手渡してしまった。

「あら、ありがとう。貴女も飲んでみて」

先ほどペースを合わせるなと言ってくれたばかりなのに、と心の中
で嘆きつつもグラスを手にとった。

残っている赤ワインを胃へと流し込み、空になったグラスをボーイ
へ手渡すとボーイは速やかに立ち去っていった。

花を観賞しながら談笑しているとついに赤も白もボトルを空けてし
まった。

それは美味しさもちろんだが、この女性の話術が長けていたからだったと思う。

「あら、いつの間になくなっていたのかしら？」

わざとらしく空になったグラスを掲げる。その仕草は妖艶で同性の私ですらどきまぎしてしまう。

「貴女、顔が真っ赤よ？ 酔ったの？」

私の顔に視線をむけた美女が口元を緩めながら、赤く染まった頬へ手を伸ばしてきた。

そもそも、二本のボトルをほとんどこの美女が飲み干し、私も付き合い程度にしか飲んでおらず、酔うには少し早いくらいだが、パーティーという緊張からかすっかり心臓音がいつもより陽気に音を響かせ、身体中の体温を上げていた。

「暖かいわ」

美女はふふ、と声を漏らす。普段の私ならきつとこの妖艶な笑みを前にして卑屈な考えがこれでもかと頭の中を駆け巡りムダに落ち込み、絶望をかみしめているところだが、酔っ払った脳ではそこまで考える余裕すらなく、ただただ、頬を赤らめふわふわと体を揺らし、心地よい微睡に浸かっていた。

「どこかで休む？」

覗き込まれ、目の前に広がる美女の瞳をぼんやりと眺めながら重たい頭をぐわりと揺らしなんとか頷いて見せた。

「頭が落っこちちゃいそうね。歩けるかしら？」

口元が緩み微笑んでいるように見えたのは私の脳がアルコールに攻撃されていたからなのかわからないが、タイミング良く差し出されたこの白く細い腕に私は縋りついた。

この噎せ返るような花の香りから逃れたいと思っていことを見透かされたのかもしれない。

「ありがとうございます」

消えてしまいそうな細い己の声に嫌気が差す。何もできない小娘が、と誰かが罵ってくれたら、思う存分落ち込めるのに、と浅ましい考えが頭を過る。

これだから、酔うと碌な事がない。

醜い感情を胸に私と美女は建物内へと逆戻りした。

「どこで休みましょうか。あ、とりあえずこの椅子で休ませてもらいましょう」

庭から逃れてたどり着いた先はリビングへ続く廊下だった。廊下には等間隔に椅子と花瓶が交互に設置されており、その中の一番手前の椅子に腰掛けた。

椅子、といってもソファーのようにふかふかでゆったりとした広さがあり、ドレスがくしゃくしゃになってしまふ被害を抑える事ができそうだ。

「私は誰か使用人を呼んでくるわ。一人で大丈夫よね？」

「はい。すみません」

気を抜くと瞼が閉じてしまいそうであるのに、気づくと反射的に答えており美女は疑う事なくその場から離れて行った。

美女の後ろ姿をぼんやりと眺めていると瞼は意識とは別に力を緩めてしまい、私はすぐに意識を手放すこととなってしまった。

31（後書き）

全然話が進まない。

もうしばらくこのじれじれいらいストーリーにお付き合いいただけると嬉しいです。

【業務連絡】

感想を書いてくださってありがとうございます。返信少々お待ちください。ごめんなさい！！いつも励まされてもらっているのに遅くて本当にごめんなさい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3599s/>

切なく響く

2011年11月21日14時31分発行